俳諧新五百題

へ 5
5529

へ 5

田喜庵大人輯

俳諧新五百題

江戸 万笈堂英平書

昭和26.6.7 内倉則之氏寄贈

[illegible]

新五百題 剞[illegible]なるを追ふるものゝ複物也
[illegible]揃ひて[illegible]のもの全合の翁が序
[illegible]を脱しとあり[illegible]
月[illegible]
[illegible] 隆る秋十附斧[illegible]の[illegible]
加ふ 此草稿を一場の[illegible] 鳥
[illegible]病[illegible]節[illegible]再ひ
筆[illegible]
果て[illegible]鳥有の郷に帰す[illegible]

古今世集の遺儀めくをゆ世集ハゆへにて謹め
拾遺儀たえ／＼なりけるによく巧者を伺
書し竹橋の年に撰まれ句々寓ぐを
撰まさしめ其後にも是を伊恵しあり
享成りしをり曰大流派の発句に類題
何事か橋本上方ものしきたえし何事の如し
左へその人々の云置ける句々を踏るり一級
二級を心を請まもて移りを撰まれ是を我当に

古今無し　此年頃初紫氏の撰集をなん
大有力の人まじをるをもなりて纔世の人なまで
撰をきさる題意あるを附子を境子に心の
稀となりてけりなをら道る　さるを此
集につき当に聴る句の境界の心を置を
以をおそく此捷徑なるにもしたるに一聴の
古事などにもおなく思ひ合さなずは聴題のお
とに後を奥底もなく撰まつて発句以ひ出る

倭歌も古事にも古人の一字をもとめては
すなはち世に以ひ遊ぶある句もれたとへば風流の
木稼の衣裳あるあるやうなるは何にもかまへ
天地風土のなきものしさまざまにもゝ作よ
いひもあり句まてをいはん一節に何かと笑
き人のよき衣装あるあるやしまうに似せ
えらけ折くるまし　かくいへどとも
人ゝの句ともを拾ひあつむる自らよみ集め
何程す為に一級も二級も思ひよまずにせ
新風見ゆる夜なほ未だ何ごとをもつゞくる
まずも物知るも程しへつゝ古程ありしをつまびらか
なき為に代ゆるものも友人孤山まする文
時己丑織八の日序之

凡例

○おほよそ俳諧の発句に題をわかちて部わけせるハ
源俳の明題様式の類題をはじめとして歌林歌苑
ちうき歌叢などいへるの流行せるに従て編集せしに
汀凡家くの捜玉集ハそもそも季寄和の始めよりおもひ
たちて草稿をつゆるまでなすまくて五代におよんでとも時
至りぬしてもむなしく歳月を送りてぬるいぬる寅の季
先師金令翁の余慶止俊の旅宿の筆記より多
くの俳諧の金玉を捜し得てうるハ諸邦の文音読し
く是等の句ともをくハへてここにふたたび歌真備よりて

かくて此撰の行に事のさまおもひ合せし先師仮初の
病床にうちふして卯の花のちりしくまで不例なりしが頃日
筆もまゝならず時々先の句のをりをりなどしばし眺め
これをなぐさみしに先のことばを書とゞめし句ども書あつめし
入りしこの撰集の成就好みてはなはだしめ

○同じ歌の童なかりしにいふは清しと数のうらにたてまつりて行ふ
一紙に五句すくなきは二句にて定め柳数を書ちらす
句をも記すくとありしむるなどゝ梅の下に梅月　散梅
時雨の下に夜時雨　松風時雨なんど出しもあらば
余はおしてあるべし

○歌仙は数多の季寄にて合せてその季候を
はさむもありといへどもその題の外なるもあり
○人情にまかせてかゝる句を撰むは少しく耳底に留まる
句なども有りてその言葉を切字の数も如何はしからん
広く集めなさる事のきはなるにいたらざりしも
○ときはの歌にて出せる句に作者の趣意の遠ひなる
まゝにありとは皆はなかりその集にもれし集の交
らひあつめてまゝ何の集にもありてはやくしめ
あつめんとすをとしも思ひて事のはかなきをも
○句の其後は筆記するまゝにしてをさめて　秋蝶貴嫩

○のせいは此集にしるす撰者の句を多く出せしは
句の不足を補ひて此集に記して置く事も告
近きころ陸奥人の序ぞや事を思ひて此の記にあらし
人家をと出家翁の梅か詩稿の例に倣ふなり
○巻中名字を記しけるは是くさの姓名へ家名
志られぬ婦の名を列ね字を分ち又妄りに記しむ
古人は園号を記して雅号を表す同君の仕えたる
事を其事に書名を出すのみ

名録　任題次不論前后

山城

草阜　草圃　千枚女

京

○蕪村

○嘯山　○蝶夢　○闌更　○几董　○移竹　○諸九尼

○方廣　○車蓋　○月渓　○馬印

如泥　蒼虬　百池　貨僕　士朗　寸丈

雪雄　梅價　金菜　杜蓼　路一　木海

守三　千崖　六倉　乙彦　月峰　空阿

五芳　梅笑　定雅　布雪　其成　鈍李

尾全

摂津

○瓜坊　李竹　呉光　一扇

遅春　故友　茶来　紫金　桐栖　三味

釣翁 一草 【大阪】 。大江丸 。升六 。二柳
末仙 。友国 。蜂友 。延竹 。尺文 月居
長斎 米彦 魯隠 萬和 屋烏 瑞馬
奇淵 携雄 扇暑 三津人 菴十 古楽
杉畝 我ゝ雪 百嬰 一肖 林下 琴亀
蘿文 古川 真插 福米 拾女七越 星譜
木老 禾木 祗白 竹呂 竹兒 升雲
如山 核伏家 可成 其友 孤竜 梧桝
赤男 湖ゝ 玉甫 方中 方貨 百卿
菁野 藻蹊 松斎 湖外 竹因 幽季

。万壽友 井左 梅一 槙立 一枝 。東
百恭 律山 魚眼 自楽 井眉 一我ゝ
嚢六 烏明 【和泉】 清風 天光 千枝
喜脊 【河内】 耒雉 笛さし 雪橙 燕之
菊裡 古岳 【大和】 。魚徠 緩駕 仕候
圭々 方馬 徐覚 其粲 和琴 霞村
李冬 青々 千柳 林糸 可琴 左一
子雄 如升 吐山 長水 三喬 杜口
呉友 蘿ゝ 朗光 巴人 【丹波】 。青阿
武陵 守豊 光浪 野楊 【丹後】 万籟

巍道　伯耆　帰来　草臺　如毛　出雲
蘭々　嵐吹　嵐水　太柏　冬曠　梢屑
美作　梅人　榮女　玉川　鶴六　如斯
桑人　遅素　無一　百丈　李青　宇橋
家彝　播磨　○青蘿　玉屑　○蝸国　備前
野江　楚狂　菊雄　杜流　梭磨　寛里
尺城　備中　春樹　渓嘗　暁翠　支介
棹歌　孤舟　八重女　晋和　石草　五蓬
梅閑　安藝　篤老　九十　玄蛙　可友
○綾彦　長門　羅風　万井　豊前　○露竹

几卜　文砂　玉泉　露白　万里　弥六
其嵐　未父　巴丘　来同　黒水　○沉流
東阜　豊後　○巽我　葵亭　月化　五杉
芦舟　斐暁女　鯉尺　亀六　下任　弗水
写月　以木　麻彦　三顧　○徂牛　筑前
糸遊女　帰来　里芝女　筑後　畔鶴　三浪
五出　五中　東鶴　化竜　月露女　肥後
○綺石　肥前　肝先　○莫二　菊也　和川
三津名　○天外　芳水　日向　其芳　淙水
蘭丈　竹市　薩摩　琴洲　泰昌　伊豫

○樗堂　画中　何竜　桃坡　五橋　鳥旭
涼瓜　○静山　楼水　露堂　雲蓬　浮舟
春祐　都允　讃岐　春耕　天雨　葛也
阿波　草史　鳳一　蘇尺　菅六　禹門
弓雄　李径　有則　左学　鷗里　淡路
李長　若狭　烏白　近江　○騏道　○重厚
○芳之　○柏翠　○祐昌　○亀梁　○亞渓　可盈
魯吟　恵徧　芠丸　三省　烏頂　二盈
花陶　寸當　志ゝ女　千影　申斉　鶴峰
竹世　還古　春雄　米友　宇洋　土明

伊賀　○若翁　猪来　伊勢　○樗良　○羅外
○獺来　○来汐　○坡仄　○麻父　○杜影　○丘高
○青川　○素因　敬叟　椿堂　達三　菊守
烏卒　對雲　霞外　蘿道　李東　淇石
竹芝　涼濤　梅六　楚山　梅堂　宗巴
菊所　推已　月耕　帰来　宗古　如一
鮫山　竹之　丹霞　青芝　南阜　雨未
藤壽　梅彦　斧扶　鷺洲　居夕　桃彦
松国　其白　澳舟　六車　野渡　典跡
昌作　春暉　暁浦　里朝　宗雨　岱朗

寸陽　巨洲　月蕉　雁路　烏章　艸友
卜蝸　千外　翠川　梅樓尼　○應嵓　省吾
蕭雪　雪三　虚舟　介立　杉廬　也六
塩叟　宗居　【尾張】　○曉臺　○也有　○白尾
○松兄　○白図　○士朗　○方明　○岱青　○挂五
○魚堂　○卧央　○羅城　岳輅　昆明　塊翁
梅间　足彦　茶陵　紀　竹有　宣彦
咲菊　而后　少汝　路郭　大梟　我竟
東陽　呂川　舒汀　【美濃】　蛙春　【三河】
木朶　卓池　梅老　秋挙　路堂　木芽

流芝　【遠江】　五雲　【駿河】　○石蘭　【相模】
○春鴻　○島三　○叙来　雉啄　豊女　九二
岱松　豊水　鳥沙　薫岱　一髄　縣々
洞々　二秀　盞風　李翠　棠懃　雲舎
亀鱗　珠山　永枝　東湖　隣松　雉扇
玉珂　石老　岩甲　烏流　芝得　鶏山
烏扇　亮儿　那謨　麦里　東玖　亀洲
松蘿　雀角　九臯　秋菜　江水　長羽
露竺　○丈水　起石　【甲斐】　○可都里　槌村
漫々　平歡　嵐外　臺眠　盤守　如松

百二　百慈　真恒　園亭　秀哉　孫彦
吐雲　○【飛驒】　儲吏　歩簫　【信濃】　○希言
○柳荘　○猿虎　○文兆　玉蓬　可學　雲帶
梨翁　亀丈　故園　奇峰　八朗　千鶴女
伯先　信ひこ　山し根　素槃　菊成　何九
織席　真蓑　虚白　【加賀】　○千代尼　○眉山
○斗入　○仏仙　○松井　○鹿古　○芝谷　○来几
其翠　風芝　麻直　草均　年緒　真澄
時喜雨　桂枝　奇石　大常　五葉　湖山
巨氷　斗山　蘭窩　名恒　雪人　三兔

【能登】　○寒崖　【越中】　○嵐丈　○呉山　○蓬山
白年　知竜　魚扇　北冥　五湖　軋夫
背月　百甫　岡雅　晋峰　東一　甘行
席暁　伯芝　くめ女　逸英　雪幸　爲命
【越後】　○路丈　○宜啓　○尼琴　○由都留　三鶯
蓬秋　荘二　石海　吟糸　五雲　於久女
其興　旭浪　東陵　東峨　二川　弄山
梅笑　呂水　卓二　貞風　藍卯　巣也
秋帆　旭路　少年李宙　田都喜　夜江　知及
昇魚　○此江　○飞老　【佐渡】　良談　【出羽】

○長翠　○五明　○野松　渭翠　河道　五貢
淋山　衛足　陸奥　○白居　○貞松　○岡南
○夫芝　○菅菴　○巣居　○鉄舩　○乙因　○根薮女
乙二　雨考　雄渕　寛兆　素竜　且々
さよ女　雞路　雪堂　平角　変南　布席
雪岫　嵐庭　壺山　与人　繁里　かつ丹
誓渓　買月　旧友　東芽　大兆　冥々
為代女　素々　桂裡　紫山　如山　紫明
読二　扇風　文々　常陸　○道隣　○岸根
○遅月　○渇雨　仙雅　○露中　○柿丸　○義香

山子　文鍱　聴雨　ぐし　風實　霞浦
利根吉　○山有　○蔵六　○千万里　○竹雪　○万尼
李尺　松江　昭眉　三有　蘭魚　雪守
東季　帰石　真彦　雨麦　泉之　無長
淡斎　嵐兆　茂李女　上総　○俚言　○灞陵
輪之　○三化　浩凌　梅月　知方　里丸
鵬翅　安房　杉長　素共　素水　平雄
百羅　其石　千雄　悦二　仙舟　下総
○存阿　○菊女　○恒丸　雨塘　梅史　素迪
牛乳　笙々　青岐　廣陵　素莱　長湖

普記　亂文　鱒々　鶴老　永遊　危印
李峰　桂丸　折翠　[下野]　やさ岐　魚文
巴蛍　魚とき　素考　兎水　芳竹　北岱
椿海　如翠　瀟川　陶里　柳起　兔居
[上野]　○蘿月　浦人　壺半　○朴哉　松司
蒡丸　旬光　九雀　雞周　桃心　茂
阿ろ　輪雲　鹿太　川二　巨昇　とゝ女
月嶋　竹溪　根菅女　可良　米室　[武蔵]
○柳几　○喬狐　○梟兆　○星布尼　○也好　○一梟
○雨邑　国村　可来　五石　東圃　麥穂

有義　呂律　是翠　燕市　五縄　貞秀
岩翠　周里　双烏　太良彦　南井　楽水
古玄　魚連　梅溪　石鶏　白度　南鵠
すゑ女　下桑　市呆　有基　東蛾女　麥花
夬山　寸草　○樗白　○琴女　一雨　周居
米砂　ちゑも女　栄子女　谿春　梅夫　氷佳
観海　一歩　耕雲女　東壽　為衆　道もせ女
年守　和調　兼歳　楽山　少年 岐山　大樗
竹山　鯉隠　成章　三巴　峨山　喜篤
得阿　曾逸　翁賀　雨蛉　[江戸]　○存義

○蓼太　○鳥酔　○柳居　○白雄　○吐月　○樓川
○宗讃　○鳥明　○柴居　○祇徳　○太無　○保吉
○班象　○兄堂　○沙羅　○政二　○雪万　○川上氏不白
○白養　○ノ且　○完来　○午心　○胡準　○成美
○梅人　○莎笠　○冨屋　○朶年　○壽翁　○無説
○政らし　○道彦　○名彦　○連漪子　○鶯卯　○石芝
一蕙　寥松　瘦菜　梅壽　こし　渡風
孤山　さち雄　倫市　玉光　守靜　ちつゑ女
ちさ女　亀山　与洲　古聲　鵬斎　泰水
阜花　袁丁　棧車　默斎　雪人　曉河

曲阿　文貫　ゑつ女　清素尼　可九　塹舟
普成　一鵞　九朴　松欣　竹坡　碩布
右雄　碓嶺　窓雨　亀遊　荷乙　楽只
不尽　梅塢　曽牛　敬義　かつの女　竹里
天民　克一　喜山　杉露　栁美　士升
鷺洲　花川子　直也　列山　せん女　花女明石
青牛子　鷺雪　かつ女　鶯笠　五鹿　蕉雨
對良　草芝　北元　麻交　花籬　對山
與山　水直　月守　花女豊岡　知昨　茶静
双湖　菓塢　花笠子　菜山　素玩　炉扇

虚舟　頓高　燕陵　淡水　其堂　明良
草丈　南汀　竹馬　栄枝　不騫子　雪彦
應々女　行さ女　アヽ女　乎焉　詠帰　楚遊
ちゑ女　輕子　車両　仙枝　仙骨　桂羅
黒谿　而男　訓山　成之　季道　松丈
風谷　為徑　芳居　宇橋　鹿阿　杜英
よし磨　啓山　一峨　千河　春谷　文鼎
春葺　少女さち　太節　桃生　山松　不木
亭馬　里外　すゞ周　夾樟　栗陵　武山
翁和　共賀　五陵　利雪　萬里　芳洲

追加

芟山　有月　雞羅　心非　盤布　春来
李江女　来賀　子明　呉莠　司馬女　麦洲
久城　月一　新賀　石馬　蟠　佐女江川
素樸　秋耳　蔚志　嘉川　光人　箕青
馬雪　杉枝　松江　其翠　翠喬　磯太
伊豆
一瓢
相模
和夕
加賀
士峰
文鈴
下総
千丈　麦典　簾雪　守一
岨翠　斗圓
安房
越児
下野
暁烏
原水　平山
武蔵
不玉　李川　下毛芹好

春目録

立春　初春　今朝春　御代春　花春
正月　佐保姫　元日　初日　初空
御降　初鶏　若水　初暦　寐積
初夢　着衣始　書初　門枩　蓬莱
喰積　穂俵　太箸　水祝　羽子板
萬歳　傀儡師　猿曳　子日　小松引
人日　七種　若菜　薺　芹
併座　飾焚　養父入　御忌　春寒

余寒　春雪　淡雪　残雪　雪解
凍解　長閑　陽炎　糸遊　霞
東風　春風　福寿草　梅　梅月
散梅　柳　青柳　梅柳　椿
松花　木芽　若草　春草　下萠
草萠　茎立　蕗薹　土筆　草若葉
百千鳥　鶯　雲雀　駒鳥　鸎
猫戀　白魚　蜆　海苔
二月　衣更着　初午　事納　薪能
涅槃　彼岸　西行忌　水口祭　二日灸

出代　貝寄風　鳳巾　春日　春月
朧月　朧夜　春夜　春雨　春山
山笑　山焼　焼野　春野　春水
紅梅　花待　初花　初櫻　糸櫻
連翹　五形花　蒲公英　薊　茅花
芦芽　葮子　篠子　接穂　指木
菜花　大根花　獨活　山葵　早蕨
蕨　杉菜　薺花　五加木　枸杞
蒜　蘩蔞　摘草　畑打　苗代
種卸　種漬　鹿落角　泊山　朝鷹

雉子　春雁　帰雁　曳鴨　引鶴
乙鳥　鳥交　鳥巣　春鳥　鳥囀
雀子　初蝶　蝶　蜂　虻
蛙子　蛙　蟇　蛇出穴　田螺
和布
三月　弥生　上巳　鶏合　曲水
雛　汐干　壬生念仏　峯入　炉塞
春霜　別霜　永日　遅日　春海
花　花雲　花曇　花雨　花雪
花見　花守　散花　桜　山桜

八重桜　遅桜　散桜　桃　梨子花
海棠　木瓜花　辛夷　山吹　躑躅
藤　馬酔木花　菫　母子草　水艸生
葱花　三月菜　青麦　茶摘　喚子鳥
鳥入雲　麦鶉　若鮎　蛤　蟶
蚕　暮春

夏目録

立夏　四月　卯月　青簾　更衣

綿抜　袷　夏衣　日傘　扇

團扇　蟵　新茶　青さし　筑摩祭

葵祭　大矢数　灌佛　花御堂　夏篭

夏書　昼寐　短夜　明安夜　夏夜

夏月　夏山　夏川　卯花　桐花

盧橘　柏花　茨花　さるとりの花　樗花

若葉　青梅　櫻實　葉櫻　葉柳

若楓　牡丹　芍薬　葵　罌粟

苔花　杜若　鳶尾花　木艸茂　木下闇

夏木立　常磐木落葉　松落葉　竹笋落葉　笋

麥刈　麥秋　茄子　覆盆子　鷹入塒

杜鵑　老鶯　鳰鳩　割葦鳥　行〻子

鵜　鵜飼　松魚　鮎　鮓

蝙蝠　蚊喰鳥　蝸牛　枝蛙　蚕

孑〻　蜘子　蚋　毛蟲　蛭

蚊　蚊遣火　蠅

五月　幟　飾太刀　競馬　印地打

粽　菖蒲　菖蒲酒　帷子　半夏生

梅雨　梅雨晴　五月雨　五月闇　虎が雨
夏雨　早苗　田植　早乙女　粟蒔
竹植日　若竹　合歓花　樗花　栗花
柿花　山梔子花　紫陽花　南天花　百合花
姫百合　夏菊　撫子　酸醤草　十薬
紅花　藻花　萍　真菰　青芦
澤瀉　蓴菜　川骨　蓼　鹿子
鷺音入　水雞　蒼鷺　鷭　鳰浮巣
鳧子　蛍　照射　火串　富士詣
六月　水無月　氷室　夏氷

祇園會　祭　鞍馬竹伐　施米　雨乞
土用　虫干　暑　夏日　炎天
雲峰　夕立　青嵐　風薫　涼風
月涼　納涼　清水　晒井　葛水
水飯　心太　一夜酒　蕈　竹婦人
汗拭　夏瘦　百日紅　凌霄花　蓮
夕顔　昼顔　葛　葎花　麻
綿花　瓜花　瓜　芨芒　夏草
夏野　青田　田艸取　川狩　羽抜鳥
翡翠　蝉　夏虫　灯取虫　御祓

名越祓　茅輪　秋近　夏景

俳諧新五百題巻之一

田喜菴護物輯

○春之部

立春

春たつや梅さしよる指の先　士朗

二日とも三日とも顔のおとなしさ　丘高

春たつといふや杉の用に流し　長斎

ある立て海ものや常の横結び　一瓢

其ゝつや舟の下比流れゆく　五杉

初春

鳥の羽まてそむる春の光かな　揺良

初そらよふこれはるのゝ帯子の物　綏鴛

今朝春

もり春や板戸岳の菜大根　太郎彦

初くるや出出ぬけもんの晴れ桃子　雉啄

日のもとにたちさかやさしきしげさの春　挿八

人の釈のぬうへ見えありと軽の春　松兄

抔子兄の係子出来始ゆきのたけ序　鮭春

御代春

まへいらぬ人にそのかしま軽の春　摶雄

山ぶくぶくかんみ手持ゆりも清の春　南升

くもりなき名も名ありける代の春　如泥卿

夫代の春男と朶八杯くもりけり　貞松

家人の謎もとけさる代の春　玉光

花春

色のそ数家おいちのいのちかな　蒼虬

月の夜に春なる晴しさきた花の春　屋烏

米くら子のをし眼なくとも色の春　浦人

花の春年かくれのも負なんとん　一蕙

色の春にこもまれなる浮世なり　痩菊

正月

水仙のちんなやとも咲く暁月夜　みち彦

正月や見られてはきも袖の月　乙二

正月や庭のよ持なりしもし　蔦三

若菜かや正月ぞる小田の層　升六

正月のそうへ春よりいそうしき　寛兆

佐保姫

佐保姫の弱りよまもり鼻の毛さへ　嵩兆
さほ姫やる雨を見送るはしの上　菖三
佐保姫の重ね衣や扇子折　旦て
さほ姫や徒くしくさ枕　叙来
佐保姫の光を紅をて春を経てけり　仙雅

元日

元日やさの子みとき新年けり　移竹
元日と知りぬのまゝ秋新酒　闌更
元日の鹿の子あれや宿のたゞ　春鴻
元日かくて二日ござれける　雪雄
元日や笛をみしておはく面白さ　樵村

初日

初日影さしてや山田へ鶴の声　芦舟
日出て光添てる音を嬉二つ　菴十
おほ日うや鼠の尾もさす初日　輪之
かさる祭よ涙よ伴ひの初日の出　美とし

初空

初空や舟越しては灯をともす　美ゞ彦
初空や大樹の茂けの日の光　星布尼
鳥は鳶の初空をそらこほし　狐山
初空や先まづこえる庭花の上　幸雄

御降

御降りや玉のあれ家る穀を見えける　乙二
御降りや玉のぬれてある五十鈴の声　嵐丈

浅倉の名さへ恵しき春の声　寄渕
清濁ともに名も亡し雨夜ぐ　雨考

初烏

昼からは畑ちかくしき川鶏　班象
初烏降らくさむる浦の人　雄渕
むしろ出る浜の行く初う手　苫舟
烏羽玉も名もなりんさく鶏　畔鶴
去年の鶏去年のあいさ大きしや　自楽

若水

わか水や梅のさくらさ菊の露　二柳
若水や盥よりうく鶏の羽　簾雪
若水や上井の日ハ光るかれ　守静

若水やさくら河ぞし椿の葉　貸僕
若水も鶏の一群うつしけり　女 夏暁

初暦

初暦はじめ飛ぶは小家かな　蓼太
遅き日と人は漉れたる初暦　吐月
何のかの手がらくさるつ暦　青蘿
鶏の巣が香後久し初暦　暁河

喰積

喰積はじむや鶏ひまいかぬやおいさ　葛三
飯時もいさそ喰はじむる雨の流　護物

初夢

初夢や松よつる春草枕　漫々
ちつ夢やこれから動く人ん　黎女

着衣始

初姿きて酒のむところかな　光堂

たつ姿の旅寐も枕せまりけり　桟車

初姿やさし見え扇り小盃　女子依

仕合に纏てをかしやきそ始　首三

うぬ衣の着ころや来て始　其芳

書初

書初よ史邦か涙先思し　要彦

松の画に松の笑くん書初す　きさ岐

娘の子の何えかゝりて筆初　鯉足

門松

松立て人のうけさん小家かな　斗入

家人のとのくろえんて門かざる　雪雄

阿弥陀も妹よ云れつ門の松　蓼丁

万年の庵本に添しつの松　石芝

かひて世を見るにし门さき　暁河

蓬莱

中々にめでた家蓬莱六文で冊　亀六

蓬莱や去つゝよる雪の秋　畔鶴

蓬莱も不見好ものゝ根の角　菊所

蓬莱や積かしる示す子　玉蓬

蓬莱に拵へ寿しよしき山　素龍

喰積

くれ浅らもくもの斗や屋敷かな　生彦

喰つくしもおくら湊の紀世常　梅寿

穂俵

穂たはらや宝の舟には波も来て　乙二

吉川の白山や大人衆そろし　譲物

太箸

太箸や古きよりよき先の杖　完来

たく箸の力もめでさん雑煮もち　下住

水祝

嫁とりの水祝ふ夜見えにけり　峯彦

一村の浜清水にて水祝ひ　古楽

羽子板

須こしては貝負かりしもいろは　花径

打て羽子や月の中より落るまで　蓼太

くる板の綾のうつる光十とせ前　參松

其の人の筆かゝれる羽子の子来　三化

萬歳

羽子板にうけし家来のよみ口つけ　はしめ

万宝に持ちうら敷く鍬日の本　綾彦

曙を云ふく万家の扇の取　さよ女

万家に重て不老不死の酒　楽水

美家の云ふし年をかくれけり　豊女

万家の手こそ持はさす月日は幸　護物

傀儡師

悲歩りぬ猫そうして傀儡師　吐月

与次郎にさへも川宗や傀儡師　一宵

行さまの浮世を傀儡師　三波

大津絵の昔は恋し傀儡師　渡風

猿曳

猿引にせ杉さへ飛なりけり　浦人
祖父や舞姫の牛飼うしろ云　ノ旦
猿むさや杖つく歎も寒の前　石芝
若年はいひけらし猿の時冝　護物

子日

子の日にむさしのうつや千日の松　春鴻
小松あく門の雪中の子日かな　乙二
雪消ぬ雲のかよふ子日かな　方明
雲の果によし小松も子日かな　梅壽

小松引

先の年や杖にむかし小松川　樗良
五ケ日ハ植ていろよき小松川　白尼
祝ひてかれハれは小まつ川　可都里
かくいる松葉世々人は小松曳　護物

人日

来る人の日なまへ若菜　呉山
人の日やとかく晴るる神の馬　嵐夫
むしの日や笠傾きて伊勢参　亀肱
日六位の烏帽子も人の日あそび　玉珂

七種

粥くさの上一色ハ菘も加　佛仙
七種の六日ハ月の扱ひなり　上胡
七くさの唱ふるやとし男　白養
むくしきの打橋かける田家かな　鶯邨

若菜

七くさの門に聴かし下駄の音　敬叟

艸ハら脱て菜につみし畑の人こゝ　完来

雪ふちに男の根くし若菜かな　雪雄

菜もしよし尺地も若菜の雛も宗　露中

わか摘と云ふや京野も来る雪間　可孚

世をに志らぬこのを哉のわか舟　女 ちか紀

薺

持提て行ふそしらちや薺うり　乙二

鉢植のうちに出ける薺かな　春堂

惣丸の声かおつり薺の夜　莫二

かゝる船薺うちてよひあくる　古岳

芹

くろさや芹もてゆひし芹の束　保吉

鶴の嘴いかにつけよん根芹さ　諸九

雪より八風のさむしや芹畑　雨塘

芹洗ふ来さり桶屋か礼もとり　且く

日のうけ水をつゝ芹田にゐるきくる　女 于佐

佛座

折しかすもむしろ離きてほとけの坐　春樹

…子に来て一花をつや仏の坐　素考

粥草の名にハいまれや佛の座　胡準

…霜も耳かき仏の坐　文貫

飾焚

夜の鶴にんくの路ととくまり　尺艾

養父入

人や住む飾焚あるいそ山田　画中

かさゝ焚て花水鶏に霰ふりけり　江戸 雪人

古へ蝶に出そめてなし飾さく　黙翁

まんぢ入や枕の足の一首よ重　白雄

やぶ入やうるゝ見ゆるうちの山　万和

藪入やけ跡とりもなく連の森　木朶

養父入や幼ころの山の川ら　士卯

やぶ入の身うつ寝に菜飯か糸　奥つる

御忌

あには女や京を寒しかる寺詣　蕪村

うち水をよけて通るや寺詣の後　重厚

後来ぬ暁ゆかし寺詣七日　升六

旅衣脱つゝ寺詣に重ける哉　午心

土筆摘む野堂さびし寺詣の後　魚成

春寒

春ちまき登る森ゝの寒さかな　碩太

星ふる川水田に落る未ゝ泥し　雪堂

寒さやき濱の東市やまだ寒き　三麿

也船ももまつ塩たまりや未寒さ　壺半

余寒

芽に屋の不性になりぬ余寒さ　漣漪

庭との鎖自らの鍛夕への　喬駟

主辨ぐ胡粉の残りし余寒哉　道陵

春雪

凡さまにふるや余所のそ煙　玄鮭

淡亀の白ハよりき見る余所ごゝろ　女 李江

椎の葉ハ耳にもさハりや春の雪　安一

さ葉の音とも消さくものうえて降　平角

消るとも人につるや春の雪　柿齋

老松のくせ木の上ヘ置てく春の雪　白養

月におちるけもちよ明なるの雪　女 ちり坊

淡雪

東のそし淡雪のあれふと知ぬ　政二

はいせや消も見附の眉牛房　くちひこ

淡雪の押ゑろけるや山りな　鶯雪

残雪

淡雪は吹草の風邪尻さり　何龍

消のこれ雪にも枝に消けり　士朗

淡雪や葉山方家の猿謡手　五明

流しちや雪のはるし〻の上　百嬰

残雪やけのこる〻墻尻　護物

白波にあかり川磯のこしき音　蘭更

雪解

雪とけの乞食に香し山路かな　杉長

鴉のにぬれ水を雪翁の力かな　義香

駒人を野の日にむく雪解川　平徹

山こしや雪翁の上を枝葉ごく　女 かのは

凍解

凍とけやさゝら波ふむ小笹　蓬払

凍ゐて二月ちらしゝ蟹の穴　朴哉

凍解や畑にも流る川の路　双湖

長閑

波よせて麻の下つゝく長閑也　春鴻

長閑さや大木林の猿あそひ　みちひこ

長閑しや梢にもちるしろ山　一蕙

のどかさは夜も背中して草の月　南汀

長閑さの光まはりて門の草　夢南

陽炎

陽炎やぬるゝ/\石のさし社　其翠

かけろふや月をまて余ん家の高　松司

陽炎や雲すく家ゝ門ゝさゝ　山子

かけろふや芋植てゆく池の土　明良

かゝやくや跡の行まて昔畑　女 ち紀

雉子

雉子はゝける畑の菜をはへぐ　白雄

雉子啼や山雉翅を揃へおく　みち彦

以て雉よ限りなき月を見さして　其堂

雉子の田野重くなりて家の[illegible]　文蝶

雉子よまつゝの後世植る寺　凡二

われと行旅人に坂をもや霞む　原水

霞

霞日やそのゝひるちらん鐘の音　宇洋

夕霞

むく牛の垣にかゝるや霞むなり　江戸 南卅

魚も穴を出入る日ハ八重霞　壺舟

並木ものハ暁まし古ゞに霞む雲　蕖湲

くもの香り翌に係居き夕霞　標堂

暮かゝる川の霞の果ハしらぬ影　岨峯

海と空ふ迷ふや霞の夕ごゝろ　布席

余所のもの二度もうつ夕や夕かすみ　梅價

ふる雨のやまとも霞む夕かな　芳居

東風

和東風や樓外の小松萩林ぞ　胡準

いく代うち東風ふ吹るや一本松　梅史

春風

冬ゝ隔りし越路の雪か東風白雲　曉河

浦里や東風にかすみつく麦の穂　宋技

初若風か何もなくてハ枝芦原　護物

日和ほど果なき原の起し土　松井

東風や折て落くる鹿の角　岱青

香よくのいろかきハこえ春の風　柳翠

鰻売も蒙路もちからなの風　風䒾

はなのきや鹿子沈し初もの売　素玩

福壽艸

下みちも植て家や福寿草　太無

福寿草まさに夜をかはり　大江丸

梅

見しらぬやてゝくの花の福寿草 蔦三
福寿草嵐もしらで廿日川 雨塘
山吹のまゝ置くしやふく書芋 雪雄
梅干をとう語家に梅の咲にけり 普記
乙日からまるゝ見えて梅のあるき 路丈
鼉竜清紗ゝめて酒しやうめの花 守豊
うたゝねや畑中の道の梅ぬき 菊鳩
まゝ川梅の覚からぬ日もなし 女 子佶

梅月

能さかしも寝ぬ夜からちる梅の月 青蘿
横に這て寒も出る梅の月 斗入
雫すら新きく梅の月あかり 素龍
夜出ては物さかう見えて梅の月 大郎彦
家ゝも戸口の梅のひら夜かな 雲帯

散梅

清やくに梅ちる夜の風の形 標堂
梅の色ちりてもひろさし芝履かな 篤老
ちる梅は小道白梅の小家かな 梨翁
梅ちるや馬のふくらさ入るる 存阿
ゆやあさの梅は則ふきま夜の角 女 應々

柳

立うかと雨をもむらぬ柳かな 不騫
さあかは旅支度も柳かな 痩菊

犬に逐て鶏行くるやまざくら　几董
色見えぬ風のゆくへや柳かな　来汶
あし陰の春にまつはる芽柳かな　荘二
柳ちりもまろし代りくゝ篇　士朗
青柳や四五尺のひる雪の中　月居
青柳は糸の結とくきけり　弗水
青柳やちらりくとれ絶眉　臺眠
春柳や眠り所くさくし茅の跡　楳價

青柳

梅ちりもて柳ハ青の夕かな　保吉
立ち人に隣年の四隅や梅柳　士朗

梅柳

梅柳東海道の大ぐしま　はし光
うめ柳千葉ハ風にさからしな　江戸 雪人
鮒のむら梢の椿さらさふくり　古眉山
咲ころし椒山え椎も椿　乙因
古き川家の椿見えし日も暮　石海
長き日の葉重々に落る椿かな　沙羅
の人陸奥の咲て東のかをるさくら　青牛

椿

来たてゝいかに緑を松の花　蘭更
松の花ちらるや畳の影も染めり　五由
連の法濁りして松の花　梅溪

松花

木芽

嚔して門先出るや雪の色　鷺雪

雪の色見え来ても生ふる也　石芝

桐の芽ばかり遅し一葉の秋に似ん　芳彦

日の入やむかふ山家のむら木芽　一蕙

葡萄の芽や白の紋さらに木芽時　白年

合歓の木秋わりてまだきに芽張る　隣松

木芽にも位を持し漆かな　樂水

若草

若艸や庭しきさの八重風呂家　逢竹

若くさや山風うけて垣のうち　巣兆

若艸や雪に押されし哉もなし　さゝ雄

春草

春草のうへに乗れる日数かな　暁臺

古池の根をたゝえや山の上　乙二

年よれと宿に蔵まえ来の草　寄渕

線香もうまぬて八なし古池の艸　鶯笠

山雀の巣入りちや春のくさ　ちり紀

下萌

下萌やこゝもそのし石の径　春樹

下もえや香宜かな云ふ人あは　竹馬

下萌や籠に似まてはつま出　草夫

草萌

草の戸や冬のゝ径草も萌出侍　乙二

草のもえいいて花の後も木来き　星譜

萩に角さしけりしんに蔽そむる　可盈

辛崎の松むらさきへさし草の露　双湖

酒に酔て雛に入るまでや草の萌　茶静

茎立

茎立に来ての化粧を見せけり　白雄

茎立ちや三ツの子まてる畠の色　五中

茎立の露おとしさすとく鶏哉　聴雨

茎立や嵐の料も猶また朧　淡水

蕗薹

よし野しや花ちらでむさく蕗の薹　九明

年の名やむさし野しや蕗の薹　武陵

松風の卵ぬける見よ蕗のとう　南舟

鯉くふて家ちくしや蕗の薹　菊塢

蕗の薹池の中より交る庵かし　碩齋

土筆

砕くほと振るへおさへや土筆　三長

又一度雷の落ちてはくし　一蕙

去蕗の跡よりはえしつくし　白度

伸にすみて土筆は汲れけり　妙扇

はげるまでや去年の土の雨　護物

もち汐に乗るく草の中の芽　保吉

草若葉

若草や葦の芽さへ見る　巴長

風姿ひく草の中の芽　葉山

百千鳥

鶯に似て似ぬ鳥よ百千鳥　士朗

折ふしも月の庭なる百千鳥　檉堂

色の世にて屋敷しくの百千鳥　保吉

花に来て鳴日は八日も百千鳥　花笠

人の家ハ寒山の花にそく千鳥　魯吟

鶯

去年の里二子鶯寺の小笠の形　瓜坊

羽をしむ鶯のくれて東風　万和

鍛冶が家に隠れ鶯の声されて　蟹守

鶯や山家の垣の化るし　古良長

鳴ならばなつかしく小家　そう女

雲雀

雲雀や庭うつりす二人連　春鴻

夕かせ花翌ながら山入りくれ見　ノ旦

雨の日も一度は揚る雲雀かな　可學

兎角して家かましき柳雲雀　痩菊

風やみて空にとりたるひばりかな　石芝

駒鳥

駒鳥や嶺から雪を見おろして　柳居

駒鳥鳴や駒嶽のさし朝日かげ　保吉

立旅のちからに借よ駒鳥の声　栄枝

山伏の後つきもなしや駒鳥の色　雪彦

駒鳥鳴や青葉の中の梢　蕿物

鸎

うそ鳴や梁ハ破れて庭かつて　圖南

鸎なくや木かくれそむる梅か窓　みちとせ

鸎のなくもかまハん鸎の声　蒼虬

うそ鳴や畑なかれの五年村　女 ゆかさ

鸎なくや櫻のはての説法日　さち雄

されはこそ猫まて恋のむかし月　士朗

猫戀

春の日も我まはし行恋の恋　可都里

恋猫や鳴あかしてもうき寐哉　乙旦

浮ねひとつに明す恋猫かな　岳輅

猫の妻せ蒜くふて顔もさん　輸之

白魚

白魚のすこし流れて世界かな　成美

白魚も世をぬけし眼の白さ　蘭更

しら魚ハ水の食なひかり哉も　玉光

に魚に流るゝ水の流れかな　美之

しら魚の月にて念のいれかも　竹里

むかしハ松のことふるき事よ　昆明

湖を取りもちかへて蜆かな　渭翠

おたり住ゐなかに蜆かな汁　壺羊

雲切て花晴にかすれ篭の蜆　みち彦

程かるに蜆のひたり見えけり　女 手代

海苔

海苔くへて酔くらしちらしかな　乙二

菴の夜ハ海苔火とらさと文よみけり　升六

遠くなる中しふるほとも海苔の中　達三

きてあかしや海苔にかくるる鷹の垣　草史

二月

花まちに梅まちにちけき二月かな　葵亭

やう木の影ちらへすし二月かな　一泉

舟唄の渡をくたふる二日かな　吟糸

きのふまて冬の流れぬ二月哉　卓老

畑もちふみゆる二月の蕗の菊　鶯笠

衣更着

きちくさや旅人も寄らぬ稗の垣　西彦

衣更着やみちのく家のおしきかる　東鶴

来さうかやゆかしく[illegible]小窓に　壺羊

さはらき晴日の出かく枳殻垣　菊守

衣更着の寒さや心つ立子る　梅史

初午

初午や木の稗くるる日の[illegible]　蕪村

初午や藪こそ低き餘の麦　芳之

ふる午や江戸一ふもの家　鵬翁

初午をとよ桜よ午寺の流　梅寿

さ川牛や赤の田井の乾く霄　胡準

事納

位所もよく紫や寄りおさめ　丞彦

鶯も歌くなりの小豆粥　素共

馬部屋もとりし事納　護物

薪能

芝能の火かけさるや町なつき　仕候

芝能や用ふき仕掛の二人まで　林下

老が代は立てし能の幕まくら　琴亮

芝能やぬくき霞ちる森の上　貯江

涅槃

涅槃会やおろくし啼く仏ろを　月佗

猿も人と見よも世の中すまれさるし花　巣兆

涅槃会や晴月の夢のめくりて　李竹

涅槃像大きな首も伴し　なくし免　知龍

云くり居きて口淋しさよ涅槃の日　蔵六

彼岸

不梅いきめえて彼岸の入日かな　大江丸

これと云ても仕舞ぬ人の声　万和

柴の戸は留主に彼岸の入りかな　蓬山

小鳥得る松ぬひとんの人通り　亀山

影のおや彼岸に入し桃の枝　孤山

西行忌

仏よさに不二の嶺の法をそらん　菊也

青柳や月も仏も十五日　羅文

下絵の形似も中西行忌　寿翁

水口祭

もしや世の杖さゝるあたりこの夕　曲阿

いのちとりよするか小夜の茅花餅　輪之

備る並の水口祭れ畑ところ　みち葭

祭る日や水口むすふ日かけ蒼　護物

二日灸

裁ちもたゝぬ旅寐も二日灸　升六

二日灸牛の休らい侘けもの　五由

清き書を二日灸かし旋しかり　長羽

二日灸すゝむ稲田に一火清し　輪之

二日灸労力を川にする男かな　菓山

苗代

苗代の馬すゝめのつれ哉　五明

苗代やみそらはよる大田妙壺　梨翁

寺町や蕪摘しまに苗代す　みち葭

苗代をこえて門さゝり妙かな　金菓

貝寄風

貝よせよ先もとさよ波別風　ゑひこ

貝よせの風を柔てや帆ゆう路　上周

貝よせや流るめ八重の羅深き　護物

風巾

切るゝやるんよ尋ねやいつの大空　暁臺

風巾かけて戻し夜の柱かな　士朗

名写よ苔る風巾のすはたかな　梅價

川[illegible]いそきしかな風巾　鶯洲

春日

菜畑の中に小家も柳中の宿　みち彦

もろのりや出まねかぬやさし松の声　葵亭

春のりや藤挑さしの笛の音　也好

銭おくも猿まつれての春日向　李尺

うつくしや春の日かけ乃片おもて　石寛

玉殿の柏子もつれ春けしき　碩翁

春月

片忠て届く来りしその月　喜翁

いつれとし水田のうへの春の月　蒼虬

扨菜の花も蓋もよ春の月　其翠

菜無もとられいろや春の宵　五石

朧月

春の月山も包みて昇りけり　清素庵

擁みて廿日ゆるりと松の月　土朗

おほろ月見え来ぬらしも有明ぬ　草阜

去男けよ蕭も出しら絲月　石雞

擁月いかに酩味噌の盛かな　軽舟

有明ろ見のとおもひし擁と　普成

朧夜

擁むや盞長きより清供なる　月化

おほろ夜や百姓町のかし廁　みち彦

桃の花蛸すくそく畑もの　買月

御へちとるけやほし擁　さち雄

春夜

はるの夜や辻うらきゝし京の子　曉臺

春の夜はきれき拂ひに出にけり　葵亭

はるの夜のしらしさや京の立し錦　星譜

なすは夜の中しきに文案覚へかり　杜影

春の来や筆の終の詠して梨　麻直

春雨

春雨や虫ハ心つもはしるもの　成美

小口から春雨かゝる薪かな　雨塘

ひま里にたゝぬ中しくはるの雨　女　子信

春雨や結えみしき轄の音　和川

春雨に海のくれゆく木かげかな　奥茘

春山

毎川にやさし杉ハ杉なりの山　來賀

詠むるに岩やくなりし春の山　無説

不定めく世にかはる形なる山　可來

かへりなおらせ出て消け春の山　五雲

春の山ゆふ白しらの姿かな　定雅

山焼

山焼やおかのふとる芝かれ　白雄

春まさへ坂口のほとりや山を焼　碓嶺

焼るかはまれよりてもそれ山のあと　雉扇

原々山ゝ父にゆくの笹の子木　亀丈

山焼に行見れも雨もなし　淀水

焼野

走のゝ先に小首伸出す焼野かな　蕪村

川越てゆく人てふ焼野哉　蘭更

草の戸は苫もさしおきて焼にけり　菖三

焼野とはし四五日の名くはし　碩布

春野

春の野や旅の者らが急ぐ花　みち彦

春の野やまだ深し行旅のくせ　竹坡

見ゆるそやせきを行人の歩み　旧友

春の野を戻りて人の青寧ぞ　嵐丈

春水

春の水の迷ひわれけり寺の前　月居

春の水艸かゝる人しぞ絶えり　瑞馬

引そくる芹の古根もまゝの水　雪雄

草ミよて木ミよりけりや春の水　石蘭

隣より菊へむくや春の水　乙二

紅梅

紅梅に霞まくる月は卯の足　士朗

紅梅や家の間行ての垣根川　斗入

紅梅に佛くさくは本うやけり　成美

紅梅や翌さゝれぬ絵なりけり　芳之

紅梅は福しうなる日かけかな　炉扇

花待

まつ月も花やあきても接翻　美ち彦

花まつやけふりくる篝流して　葵亭

初花

月遅き木末に花を待夜の明　士朗

はしくらと咲をまつくらし茶店　圭々

花を待人は書のむし山の家　楚狂

初花に二つ三つ目も鶴のこゝろ　保吉

立川花やさくらを待ちやくれし　蔦三

初花や鶯の巣にうれし老木の空　東芽

初咲や仏にもしおりて告中　千万里

初花や紀の関守るもてくれ　梅夫

まつはちる花の世の中よるもなり　擲堂

うき流の脊戸やひさしう初桜　可都里

初櫻

花川さくら濱の家には宿られし家　陶里

さればけふ咲けに添うなや初桜　雪彦

そこ寄るしやすくし日和なの初桜　護物

糸櫻

雪より傘もらひたる糸さくら　石芝

名も知らぬ人の塚あつていとさくら　一肖

連翹

連翹や野の草鞋のかけ置　巣兆

連翹の葉は見えぬよ咲の付　蒼虬

夜くるは連翹も咲き二日見　万和

連翹や雛の子いれる明かりの　一蕙

連翹の花よりつとめ月夜かな　禾木

五形花

籾ゆかし代かく比のげんげ哉　みち彦
里のげんげよせし津波の日もうきし　梅壽
大根の葉もはやくしげんげ咲　曉河

蒲公英

せん何や菩提灯の下くらく　春鴻
蒲公英や瀧よりうへの里の春　みち彦
交人ほとや一目にかゆる堂もむ　乙二
蒲公英やいつもおかるる川日影　せ山
さんほの咲や此の森山の松　石芝

薊

薊抱て蓮子とらむ耕地かな　痩菊
薊ちと日あたる畧や哉薊　桃坡

茅花

やすらひや摘まゝでて茅花もぬく　可都里
泣ぬ子あいさいも連人と茅花も　月居
山雀も久しき度々茅花よる　孤山
はるゝ庭猫の目細し茅花咲　曉河
茅花ぬかん親のうけとりで宿く　雉嶺

芦芽

ゆうさの波にはまむかはしの角　莎笠
芦の芽はふかく生や一葉　みち彦
下りしの氷まじりや芦の角　壺羊
ちんさしていつもありや芦の角　露壺
芦の芽や舟むかひに繕ふくもの陸く　石之

菠子

北山の古き池や菠子とり　みち衣

菠子打て鮎もまたゐや女房達　杏倉

すゞの子や叶一川ハ盃たゞし　秋挙

篠子ぬく裏まてしきくし蝶の夢　みち彦

すゞ刈や伏屋の裏も一夜涼　護物

接穂

庵中まいらす酒に接穂かな　白雄

涼しき穂もよし鶴や雀かな　羅風

涼しき穂の手に提られし接穂哉　素迪

春深し呑りし接穂の葉のうれしさ　窓雨

つぎ木より大木もあらや植ゑけり　荷乙

指木

陽木に其子にいよいよ行くなり　黍水

指木して物き深き古山寺　雁嶺

藤の菜や二日涼しき菜の咲　桂五

菜の花や爆の古家猫かな　鳥翠

菜の花やきちて白きて月の暈　對雪

菜の花に鳴よきさける日白くなれ　袁丁

大根花

なのはなや小松さきく隣の花　草均

活ち根生まで花の咲けり　東画

押曲流れ来ても大根さく　女 ちか沢

獨活

うどの芽や長くすりて日は　茅麿

山葵

おく霜の春にまけけりくさの芸　痩菊
山寺の冀かけたる山葵かな　鶚里
山旅の末ハ蕨しき沼山葵　與洲
採て来る法性房つかし山葵哉　一肖
温飩のおくもえてもるかな　護物

早蕨

子蕨や十日の角に十の指　存義
帰るかさかふ八ツのうとさ　玉河
わらひや小松の丈のおつりし花　句光
早蕨や典侍の青娘か家のまる　巢蛟
亀の尾ふくらくらむかなたつ蕨　危印

蕨

土を出て市に二寸の蕨かな　几董
小松原のひ葉広に来りけり　大江丸
日ハ永さを比てくるありや痩蕨　蓬扯
蕨にも其の日暮のうかな　竹雪
旅ならや毎の朝の汁　麥穂

杉菜

苗松のつかなる杉菜かな　巣兆
楽いかな杉菜に来て仕舞けり　桑年
いさ舟の岸につ門の杉菜かな　東鶴
小比目魚も子狭すや杉菜立　茅雪
ゆく水も杉菜にさらぬ坛口　護物

薺花

よしひ子や芹菊の花の夕くもり　乙二

芹のさき芹菊の花や塀の際　夢南

手かけもなくさけぬなにさく芹菊　梅價

五加木

掃よせし夜の使に五加木の新　杜蓼

月八日の咏もなく踏る五加木哉　一肖

枸杞

垣越に宿とひて俤やくこ芽ぐる　其段

枸杞垣の不二も見えけりや塀の内　九霍

枸杞の芽も菊も芽いく白艸の実　馬雪

蒜

蒜くふて人にうとむく戸口かな　政二

山陰ハ絲の縄も蒜の際から　惟九

黄作やみな蒜ほむ火打か坂　蘭丈

小春日にみなみなあまりや見えぬる生　女 尭流

蘩蔞

並ひまてもわかぬ時さへはこへ咲　琴彦

まさし咲からしんでも草はくさる　輪之

ころ庵の垣に挿みりもはこへかな　鶏周

摘草

畔畑も田になる土のたゝくさく　亀丈

徐のさや摘みしてもちるこゝろ　南井

摘くさや絲をまとひし籠の紐　箕青

畑打

はた打よこちの在所の鐘が鳴　蕪村

ここハ半分あれもやかしこの畑　希成

苗代

畑うちや和日暮して鳴子鳥　義香

きのふ斧のさして通るや藪の口　岱李

打かへしや畑打ならふ月よ哉　碩翁

春のやゝ苗代水のにほふさよ　保吉

苗代の夜を打水駅の手か　みち彦

苗代や鶺鴒をよけて家の猫　可麿

稀代も明るこゝろし苗落る　はした

種卸

古川の流を引や種おろし　蕪村

めでたさは種も下ろうや種卸　多研

浅くくと鳴夜さの色種おろし　春鴻

種漬

種漬やひとつの池に藪根川　春耕

種浸けの日から燕見る山家かな　一鷲

鹿落角

麻売て別れ角をも落すかな　保吉

女落さ角を嗅けり女麻かな　安彦

角落てはづかしげなる麻の貞　蝶夢

徐もぬき流し麻の形し角　きく寸

いけなのや家角研てのかる麻　蘿物

泊山

詳俳の名ぬるおのめる精　みち彦

打発もかくても篠のとまり山　痩菊

一休の杖飲やさし泊り山　玉光

朝鷹

月よくハ遠し霞あれ伯耆山　護物

朝鷹や毛を吹風も松の上　五橋

朝霧や見つゝ夜の明てゆく　三化

雉子

晝めしや一夜に雉子の山と川　暁臺

立かれあとのくさに雉子の声　岳輪

雉さしの足音もちかき流けり鳴　方馬

行くさ夜菜人のきゆる雉子か聲　風芝

鳴雉子の柴戸もゆかし菜飯　都久母

春雁

さく流しとすもと屋根あれ春の雁　春鴻

雁くハとり向てなく春の丁　奥堂

帰雁

帰る日の何まへ流れず大津の雁　守豊

ワうほおけ程ゆく門の雁　女 千浪

雁立て絲ハまる汀の船　駅道

北の来や合しく雁のつゝ　霞外

一羽残々さ屋しても雁か　暁河

浦島か籠しく泊のさん　可良

帰る丁書なしけふる春もちん　有莪

曳鴨

小田にある菊えても云く小鴨か船　乙二

引鴨や彩風流く舟のうち　胡隼

曳かもの赤実ちれ米田いさ　東鶴

引鶴

青無木の風からぬ鴨之人侍　女 ちゝ歩

居るはさへ戻りとて鴨の連てけり　護物

月のうへもまたへ鴨の夕か引　笛氏

底ふとの売れ八なくて鴨の鳴く　竹児

宮の一声すこさ鶴の見行かな　野江

引ころや美しかある鶴の裡　涼风

引おしむみしすや鶴のかけ和　玉光

乙鳥

乙鳥の幕へて何しく見やらる形　蓼太

陸ちらし北嫌るもあらぬ小船哉　士朗

乙鳥や又一すのうへをゆく　懶来

乙鳥かよひ巣かくれて古火桶　嵐太

小楽作宿もそこらは忘れめぬ哉　石芝

鳥交

燕が家八積堕小さし鳥さうは　みち彦

みとちつす桂や小舞や鳥さうる　右雄

木菜焚て北走乃きけて鳥交る　守三

田へちしをつけゐ日ほや鳥さし侍　危叩

鳥巣

山から先て巣作る鳥か茂の暮　闇更

巣くひれの鳥踏まさへ山ほ哉　乙兩

何鳥も子なきかはらて巣鳥鳴　葛三

鳥の巣よかくし書紙の朝日哉　徐覚

春鳥

鳥囀

雀子

羽生へて巣からおくるゝ春の園　雨塘

梅ちれば雁もさそや川の端　みち彦

淡柳に落るや門をとる頬赤かな　李長

出色に又別に来しちるの鳥　静山

囀りをきゝて杖つく山家かな　芳之

軒近や囀る鳥の外に居る　女 根萩

木々の花囀る声にほされけり　南平 文兆

晩の雨もあけて出る空の峰　枇几

雀子やそのいろに飛ぶ風の中　百明

花の影にとまる嬉しや山村家　曲都笛

子をよぶか雀のあはれふかくなる　乙二

雀子の飛までに待つ縁の側　木海

巣雀よよそものゝことさん稀なるの　炉扇

小川越のちいさくもゝの花走さば　白雄

初てみやちらして菅にての影まく　渇雨

ひとつ蝶や嬉しく曲る里のくち　志け女

初蝶や春もたゞ出る門の猶　みち彦

初てふやおりひもかけぬ古着店　女 濱藻

初見ゆる蝶遊ぶ出人の浅もしか　佛仙

おのゝ子の出る陸近く内の緑かな　北具

蜂

翁よ蜂にさゝるゝ来し菴の花　呂律

花よその匂ひを蜂のすまゐかな　李峰

大風のやゝ篠より出る胡蜂かな　石芝

蜂の巣も人なきのめふる軒端かな　白雄

くちの巣は何かはなしくらぬるに　雨塘

三日月や花待蜂のくへよ来　百嬰

葩の小風にさはる蜂の声　蘿道

巣は蜂の紋子にさはぎ出入かな　讃物

虻

かけらかまきりを見るや虻の啼　竹兒

雲雀笛よりうち淋しき虻の昼　士光

蛙子

くゝる子の牛に嗅れし家のけふ　蔦三

蛙子やてる日に水のむつまじさ　月化

蛙子も梅干しよしうまへ蛙　可麿

鳥にある宿世はありやくわるの子　芳居

蛙

人は海子のちゝる浮寝や水に星　石芝

舟かけて来るやうる田の夕蛙　興湖

松陰の淋しさことしむかしかさ　菊所

山吹を植てなくなく蛙かな　袁丁

玉子その毛をも衣もて蛙かな　故園

ふる旅の鰥田に明し蛙の声　陶里

蟇

みしら木の門ふや蟇なく夜かな　輪之
蟇なくや雪の小笹のさゝら波　義香
蟇もなくらん艸の庵のあるし時　とし緒
蟇なくや菜の花まる畠の　墾　越児

蛇出穴

蛇も穴出しといふのところ娓　孟眞
蛇も穴出るま山昔いろ人を　孤山
蛇穴を出るやうき世ものぞり　松篏
蛇穴を出るや通草も花の咲　黙翁

田螺

ふる池をのけまつ鳴田螺し　其好
静さハ巻もなくらの啼田螺　樽雄
西川の枝乃ゆとゝ啼田螺　奠澄
古川や風の戸に音のくや鳴田螺　九十九
草鞋の舞て見川のなく田螺　暁河

和布

よそ海の百ツの声さへ参る日哉　古雲
小肴とり行おとくりする和布かな　亀挺

三月

三月や海と碎んとくの酒　政二
三月の用にも米る艸　篇帝　雪堂
三月のうらちるあへくや深古る　箇依之
三月や桜をりにする人の佸　澤芦

弥生

登り登りの曙そめて行弥生かな　葛三

よきたよりの雨や弥生の末ゟより　李東

花は到て散るを惜むや弥生かな　阜池

鶯も黄は芋蔓しく弥生哉　さち雄

杉形の雲は押てや中の比の形　素水

上巳

白(?)しや後の志(?)の草餅　白雄

旅人の桃折もつ首句の形　樗堂

桃の日や馬より先を抱おろし　葛三

桃の日や杉ハかくれぬ人の友　森樟

鶏合

鶏合勝て入(?)まて[illegible]　朕臺

勝鶏のまたあらき[illegible]　瑞馬

橋の本まて志川をこえ合せ　竹兒

かち鶏の抱かれて[illegible]　斗心

厳[illegible]の[illegible]鶏合　撲水

曲水

曲水や[illegible]波[illegible]　押几

[illegible]や[illegible]の[illegible]色[illegible]　寥松

曲水や[illegible]の[illegible]　茶静

曲水に白髪もうつる[illegible]　渋水

雑

小娘の[illegible]　[illegible]彦

[illegible]て山の[illegible]　冥々

汐干

草の戸も浪きても舟の稽　其堂

をしむも足ぬ世に来し舟の粧　柔年

雛立て新らしうるや小島かな　雞周

百さうり小家を見て汐干哉　成美

松の木の汐干も暮ぬ庵し　蒼虬

鹿の下の汐干の小口哉　鹿古

汐ふ人にても汐干を松ふ日ふ　雉扇

宮ちかの跡まけしく汐干かな　芳居

間のぬるむ後日八伸ふる壬生念仏　野揚

壬生念佛

魁つる男も出るや壬生念佛　竹見

松を折る足もとや壬生念仏　加山

峰入

峰入や茶はかなきに及ぶとき　白雄

峰入や山しきかなしきかな　月化

峰入や能きを見ぬ人のあと　几卜

み供入や其のしらぬ雲の上　耕雲

炉塞

炉を塞ぐ凉よりいつ忘れけり　其梁

炉塞て南枕に寐にけり　嵐吹

炉塞や僕もなし山の井戸　護物

春霜

さるの宿待る梢のつくしき　葛三

春の霜柳の露になりもすむ　恵編

別霜

隠小屋の戸にハ来ぬかくれ霜　白雄

笹の一夜の夜ごとの別や若霜　可磨

も松も知らぬ人のわかれ哉も　黙翁

川水の亀に知らるゝよ別れ霜　山松

麻垣の麻白い流まだし若霜　東鶴

永日

永き日や帆影のさかり巡る採　呉扇

来る〳〵も日永き春や畑の上　守豊

古る日や砂に波こす雨の汲　涼濤

永き日や市中ひとつ零采操　桃生

なかき日の嬉しや波に帆の影　女 ちか尺

遅日

奥州や遅き日かげの殆むしろ　樗堂

船来たとさわぐ遅き日比かな　今虎

樹の道に障る島見えて遅き　護物

春海

いさり火て摩る鴨起きたりの海　長翠

足跡の夜ハ去りし春の海　蔦三

来る浪をかけて八重との海と来　羅外

よせて入る浮藻にも芽を生ろの海　忰夫

花

花の色も乙と八重ぬ日新　蔦三

誰か眼にもあらぬ海や花の山　玉珂

山際も花の下かもの山　芳居

花雲

人まや花待る山の朧月夜　島門

ゆかしさくもさへさそぬ花哉　蘐物

田の人におしうる哉花の雲　拆居

白雲をたちさく花のあらしかな　士朗

山伏のよく定むるも花の雲　可都里

花曇

花をとこし曇りて花に曇るかな　携堂

曇るらき春へは色の僅六日ふ斯　輪之

花雨

色に濡る偽くさきる雨の中　童亭

ゆふとるも六くくそなきや雨の音　蔦三

人なきに濡らくかとりぬ色の雨　可琴

花雪

引かふる蒲團に雪や花の雨　湛石

花の雪ふりは夜に似たりけり　乙二

六のつの花もちらさん花の雪　玉光

ワちらふぬ木の明るや色の雪　棹歌

花見

雨に泊てもえんにおりけり　完来

学うなか撫くちも見うれ　呑溪

書もちおち迄ぬし往く花見かな　尼星布

ものいきするたび出て色見かな　松兄

旅人におそうさ折く花見かな　阜池

花守

花守の折られもさらぬ花一かな　青蘿

ともしやむかし宿の薪一抱　士朗

花ちりて垣にしやかし偶ゐる　みち彦

むかしの宿や鶏なきて見る　樸光

ちりかゝる筆のさきや貰ひ物かしらん　素共

散花

ちれちれてむかしや庭に八重さくら　鉄船

ちるむかしやはなさかりの夜の社　乙二

入日さす花のくつに山家かな　素檗

ちる花にちりて旅されて夜の月夜　寫月

散る花に棚指さしてや翌の暮　暁河

櫻

二三日見ぬ間の桜散りにけり　梅六

ともしくの夕風ふく桜かな　杲兆

谷の水に影もうつすや桜かな　二巣

山人の白の手折る料くらかな　武山

鮎唄のあけぼのさそふ桜かな　草夫

山櫻

山ざくら散りて水見る　方廣

ともかくも雨をもちうる山桜　斗入

見る人の折てくれたる山ざくら　午心

酒も余るむかしや庭の桜　杉江

月のある夜そ山ざくら　午乳

八重櫻

八重桜蝶ぬ一本かな　みち彦

遲櫻

尽ぬや日をとむらし跡ハ遅き櫻　逸翁

山ふかし雲にぬけゝる遅櫻　月居

遅きにも投入られける事の春　奇淵

引かへす車のうしろや遅櫻　化龍

昔ものかたりに来て遅櫻　不木

散櫻

あふむけて面もつゝやおる櫻　岩甲

ひらひらと時されし時に散櫻　千丈

ちるや櫻二日の月の暮る　北賀

枝々や風のくゝしてさくら哉　鳥流

ちる花の流るゝ水よまよ川上　豊女

桃

云ふみ付て流るゝの散りけり　芙九

山川を飛て頬白桃につく　耳谷

万歳にもつけてや桃のむかし家　是潟

湊へハきとゝいはるや桃の花　是琴

芦火焼て蝶のけまはるそこの花　女 多代

持よかに折てくれけり桃の花　石芝

梨子花

うられ家や梨子一本の花くもり　闌更

梨子の花白き日走ちるふけり　月化

なしの花後のふられし鳥の巣　女 月露

梨子さくや雲の陰の面白さ　利雪

海棠

山梨子の花よりよき海棠かな　胡隼

海棠の色にうつして画の面　扆鳥

海棠や物いふころへ妾が業の色　五明

海棠に虫ひろひけりおきなのお　みち彦

海棠を折りそへる木ある哉　岱松

海棠に月の行く比や奏者番　文貫

木瓜花

棠の根て見さひしや木瓜の花　露堂

雪まじりて木瓜に似るゝき山縁哉　輪之

木瓜の花浸の多くも呉れにけり　太良彦

おとろへや木瓜も中く人の手　みち彦

桜次ヶ門もおつゝし木瓜小雲　泠水

山吹

山吹の泥になるのも盥か淵　巣兆

居まゝきや人の庵の垣下も　表丁

山吹まゝし總向ふ伏家哉　竹馬

山ふきの八重に咲ける散り哉　石芝

山吹や梶子なしこの渡し舟　篤老

ひとりけや水の底とは春し山　奇峰

植のまゝし咲や昔も山の留主　百慈

躑躅

ほのかに見えつしけ矢ひめ小挑灯　素共

はなし折て折人母にもの子　女ちう

藤

茶垣やはしふはらぬ錢のさき　竹馬

なかきこゝ枕にも似ぬや藤の花　雲彦

緑かさぬる宿でも藤の山はなし　可琴

佳景よけふ家もこのもし藤の棚　士朴

矢拾ひの襷みしかしふちのをも　女 ふ仙

色を日にかくしもきし藤の花　護物

馬酔木

濱の墓のこれ無縁としはなさき咲　古彦

袖に汲し春の雫やあせひ散　雁嶺

あ酔ありく小田に名残や渾し　雲彦

菫

鶯の丈ようむくさすこしかな　柏年

小草にれ情の中でもすみれ哉　寒崖

此の雨は濃さ葉も咲ぬ菫かな　曉阿

朧月雪の深さよ白すみれ　北賀

こもかこの花や深山の菫　女 ちり紀

母子草

鉢の目に見えてあれしや母子くさ　嵐丈

衰年の子家あつめし母子草　無説

振粧まて田水引行く母子草　雁嶺

古庵の春もつゑく母子くさ　奈良彦

蒔物生

うきこ草やまとめてもる軒の雨　白雄

月みよりすゝしの中水草生　豕彦

鳥さしも抛てハぬらし水草生　護物

葱花

淀川の辛きいのちや葱の花　太良彦

了ゑらん係りも来て葱の花　雪彦

牛蠅の出そむる背戸や葱の花　業枝

三月菜

よき畑や又摘しけり三月菜　蕪村

人の里は摘尽しけり三月菜　柳几

青麦

桜さくや草のもつの三月菜　炉扇

青麦や畑ちつる中の家　其貞

草青麦や猿を引る犬の親　古玄

青麦や紀へ入る山の彦　一首

茶摘

岸焼の夷あるかけ茶摘かな　三省

挿の木よ萱らけて茶摘かな　竹芝

摘む咔ハや茶の木ハうらむつさ　一瓢

家ちち出て川しさる茶摘かな　南井

山茶摘むよしや子持の寺道人　護物

呼子鳥

若葉さし肩にうけ茶よまつ　巣兆

さうふきうけるぬまや呼子鳥　壺羊

浦さやまさしく肩のまへ呼子鳥　槙伏家

よふてる何处ゆらんのむすはれのよき　光浪

呼子鳥移り八ちえぬ木ゐ　桃波

鳥入雲

見かへぬ春の行衛や雲に鳥　暁臺

鳥雲に入て草木の光かな　蘭更

鳥雲に餌ざしも拂ひやちらし草　竹馬

鳥雲に入を見る日や團扇張　美山

一のしほ雲に入なから名なし鳥　さち雄

麥鶉

畑よも声しぬ鳥なき麦鶉　左一

ほうくと出て海から麦うつら　雪蓬

雨そよく夕見えもなし麦鶉　鶏六

若鮎

むかふ岸波よりも流ぬ小鮎かな　耳谷

行く鮎やちりて夕寄る風の波　子雄

一もちかち小鮎のあらく雷の音　可成

鮎くみの片足かける撲かな　浮舟

むらや弥へくきぬ小鮎かな　樂水

ちはるるの流く踏る干潟かな　蘭更

蛤

蛤のはししけり川おちかかりけり　青川

蛤を流めをくつ乃さし足か雖　素郷

鰹

馬刀貝の陰まくる乃さし力かな　白雄

順いかる声しはやしまる刀折ひ　玉光

一る刀貝や鶴母り夫い流りきぬさ　盤布

蚕

蚕飼ふてあきし旅寐の夢や蚕飼棚　宗讃

暮春

大布の袂にちらす菓子かな　闌更

希乗くるや人の世に連す　亀文

てら宗は、まうなりしや旅鳥　可磨

蛤をむりて尺よれ春のそゝちさ　南汀

春くれてうくてふ鯛ハあまりけり　重亭

紫陽もさき汀むすや春の暮　眉山

往る鳥の舌にかまし絲春の暮　蔦三

誰くらえてうちつき一夜くやえるの袋　芳居

知る人のえんしらて春のくれ　太良兵

行春

ゆく春ハ妻にかられて仕舞けり　青蘿

春おしむ人としく似さるかな　月居

りしくや鴬引提し市の人　存阿

おききの深く操よけに菜くまの朝　百二

ゆく春をまうかしらる弥生かな　鶏蕪

田喜菴護物輯

○夏之部

立夏

きのふ迄や木屋の掃除のけさの夏　丞彦

衣さ川や樋守の衣もすゞしかち　痩菊

初夏の焼討くさまし杏のかほ　芳居

衣さ川や寐まくら涼しき宿　草夫

四月

人は居ぬ木樹くもり行く四月哉　沉流

常の扇に来ゆきし四月の哉　由都笛

きりし火の手つゞくゆる四月哉　無長

卯月

箔ぢちり宿ハ小ぐらき四月かな　杉長

四月の一ッまりや柏ちる　寥松

草臥て卯月も露む漁村かな　夢南

我曙の卯月曇りや猿が鳴　澧水

とゝへ切りてゞ卯月は山清水　平雄

臥寝し卯月のさくら菜花に　輪雪

夕日の舌ハしるし卯月かな　蘭更

青簾

差付る月いつも月夜に見えたすだれ　乙因

青すだれ暖さくらばし花や　月居

すだれ越し山をとられし思ひかな　南井

青簾そよく小降れて山の月　昭眉

すだれ越しそよと風のかくしかな　路一

更衣

翌志らぬ身をして衣かえにけり　佛仙

ふるさとや娘に着せて衣かえ　梟兆

長明か宿まで衣かえ更衣　月居

掛ある春霞しこ衣かえ　寥松

ぬぎ捨し昔の身に浸よしや更衣　可亭

綿抜

わたぬきや今朝の日より給　荷乙

わた抜や花の咲も去年にを花橘　栄枝

綿ぬきや花のさくらの其まゝ白袷　箕青

袷

たのもしき矢数のぬしの袷かな　蕪村

はらぬ目や桑林麦に菜の袷　みち彦

若すまして人はゆるふ袷かな　秋挙

鰒くふし男の気さき袷かな　素檏

夏衣

あつさをいとふ身のかさねかな　蓑三

色も香も初し昔や夏ころも　九朴

日傘

松に香る薫も日かさとすゞしけれ　みち彦

折しく八月まぬるさし日傘かな　如耕

本末はつかみて出ぬ日からかな　清風

下京や戸口にはまる日からさし　文砂

扇

ゆかしさ八ちの書にやるあふぎかな　春鴻

わすれものゝなくなしに扇この宿　青牛

川舟に四五本志絵の扇かな　塊翁

おてしろのちよにかしこる扇かな　荘二

飼猿もちよくおとるゝはよそごとかな　光人

まゆしきさ八雲の坂をのぼる扇かな　成美

團扇

新らしきさゝちて持ちくさ枕　信 文兆

ほとけの蓮をおがん団扇かな　桂五

家持ちの古扇さけや舟掃ひ　烏頂

抽でるも見えるとは大きくさりけり　千崖

鰍

住なれぬ夜を侘ありく鰍の声　百嬰

朝のまや櫻の一葉のちりてくる　竹馬

子の移ぬる片手に入し朝のこのや　玉光

蜜蜂の巣別まぎれし城跡る　曉河

新茶

庵越に透す茶山や宿の城跡　草夫

橋のあふみも砂さ添新茶哉　其友

来く庵しとふ待宵の新茶哉　松窓

ほつらつき茶の色に冷る小家哉　其芳

青さし

あをさしや下絹東風に老ぬるころ　みゝ彦

青さしや月の出る頃の物売も　二風

青さしやかざる子の猫もふくらかな　石毛

筑摩祭

稚白き魚や筑摩の鍋のうち　蘭更

うつくしき髪ほつれや鍋祭　吐山

京人来て東涼む花も咲て居る　竹児

まつりても鍋かぶる女の恥らひか　楚山

葵祭

むら川の人をとめの葵哉　秋耳

是非の世をまつひの葵哉　擣良

皆もちの日葵にむくや葵　瘦菊

大矢数

さしもさや夜も夜もまぬかけ葵　竹馬

草の衣装も多きに大矢数　燹之

灌佛

太多数仏の庵と拙もなれは　孤竜

青雲の構へいらし太多数　揩挪

灌仏やかゝくに建し堂の前　保吉

年くに生れて無量寿の仏かな　素冏

灌仏の雫も夜の夜明かな　升六

仏の生れてしまよき夜の味　太節

いせの皇子も是とし集まる仏か舎　護物

花御堂

日かさりをよせて立たり花御堂　赤男

ゐいゝかりとする妹か手や花御堂　梅堂

夏籠

竹うちて一夜こもる人かな　長琴

夏に入るん家もすみれのきさらち　岑彦

夏籠やとり出しても旅心　葛三

夏籠の日数もへりつ僧の数　泠水

朝寒し蕨の若葉も安居時　護物

夏書

難波津のむかしをあの夏書かな　二柳

夏書さん清水に直ての表　乙二

すゝ筆の曲ても尺まぬ夏書かな　其梁

夏書して耳に射たり香魚の音　光浪

晝寐

蓋の傾る井の水汲て晝寐かな　杜流

晝寐るて松風に猶の透しかな　保吉

短夜

馬下くや蚤に孫まで八つ下て　孝彦

昼寝さへ八ならぬ日さしや浮燎　政之

筆を葉にして書て向ふ穂哉　東陽

みじか夜や人まちかぬる蟹の穴　完来

短夜や有ちれ残る枳殻垣　万和

みじか夜の小川をきりゆく桂の月　掉歌

短夜のまちかねたる葦の角　宗也

みじか夜の畑にも浅しや枕の足　茅麿

明安夜

明安く明て雨もつ嵐山かな　春鴻

明やすき夜とハ来ぬ夕帆かけ船　豊安

草の戸は家によりたる明安哉　五縄

雨ふれもなき夜と云に明やすき　一蕙

明安き夜を赤子なく裏家かな　亭馬

まだし夏の夜ハいふものを波の音　菊也

ちくり川に舟て夏の夜汐のえてかり　以木

夏の夜の君や孫子集る松の露　麻彦

夏の夜や涼をもとめぬ家もなき　葛三

夏の夜やまちかぬる人もなし　玉珂

夏月

夏の月庭にふる角か静なりけり　千丈

らくなり出て月夜のしき門の夜　素龍

草の戸や娘のよ逢さ夜の月　雉扇

温泉の山比疑ふ結びて夏の月　東圃

掃切し庭ハ寒し夜のこゑ　里外

夏山のうけむくぬくものむかし　武陵

なつ山や裾にもしれず火あり　菊斎

夏山やかハほとゝきすの家ゐある　壷羊

夏えくれ只ぬれ色の山と山　加浪

夏山や雨よもそもしもし紫　玉蓬

夏山

夏川を越す嬉しさよ手に草履　蕪村

なつ川や筏かゝえて行く女　闌更

夏川

夏川よおもそ見えより三日の月　来雅

なつ川や二つにハなき東の人　木海

夏川やさゝらまりえよ小魚　女 糸遊

卯花

卯花に昔ぬるゝや垣の紫　蒼虬

うのはなや雪折笹ハいつのころ　椎己

卯の花の比も火を焚山家かな　女 去汲

卯の花も真をとさてや杉の枝　芙市

うのはなや庵ハ飯に百姓家　菊後

桐花

花さくや小里にあふる桐の雲　保吉

亭候の井戸ハ写もし桐の花　嵐水

盧橘

こゝの家にうつる音や柑の花　袁丁

おく嵜にゆるる香の柑のくれ　樊凌

ほとゝぎす隣の柑乃花ひさし　女 子枝

むかし野ゝき園の橘咲けり　業居

橘や何ぞと問ふ砂の上　卧央

こちらむ野や蝶の呼ても昔めく　みち彦

橘の香もなく屋の小笠ゆき　古川

手もちを野やそよし家の水のよし　孤山

柚花

折まで八手の葉かくれるも柚の花　吐月

柚の香のこぼれる星の明ける夜か　奥扇

小まりに付て摘もある花柚哉　冬曠

柚の香や知らぬ人にも逢ふ人　几二

よるものゝ古き人とさくも柚　文貫

茨花

花に汁のんでひらきいばらかな　千代尼

茨の香もちる野の折る家の家　乙二

雀子の飛び越ゆる茨の野　扇和

咲てさへ淋しきものの茨かも　八朗

花ちる人の巣花より茨の香　奥扇

さるとりの花

さるとりの花ながら猿をさし山路　みち彦

はるとりの花のふるさとの宿哉　護物

樒花

さゝくりの咲よむしゝや神子か袖　文貫
北辰のうけを散りもおりゝ樒　光浪
鶯もしらせぬ先から樒さく　百羅

若葉

水かけて尾に打おく若葉かな　茅麿
山ちかの若葉に除き月のかけ　貞秀
片志やうら若葉かくれて鷗　立陵
月蝕しても夜くらきわかく　芳洲
わ守の椿くさ香る若葉かな　護物

青梅

まろ枝や銀のまろくて橋井聲　来石
青梅やあまくて久しき藪在家　志け之
まろ枝や傍屋つされぬ年もなし　菊後
まろ梅や人もと通さぬ垣さゝへ　可麿
彩玉の歩酒泡より梅実なむ　竹馬

櫻實

寂しさの昔おもはるさくらの実　存何
実はかりや似合ふさくらぬ山の家　長水
はなの実露て出りけ子かな　和翠
花をおしみし涙の玉かさくらの実　輪之

葉櫻

葉さくらや岸をもとめぬまた桃　みち彦
葉はかりの気そこものくし好きなり　茶静
たきりしや菊咲日の眺くり舟　宣彦

葉柳

葉桜にまじらぬ夕ぐれ哉　なにし

葉桜やいつも淋しき静かなる家　岩翠

葉柳に何となく涼し西日うけ　玉光

葉柳や月のかゝるをかへて通る　清素亮

葉柳やおとさまもとのくるま砥山　竹児

葉柳や枯行寺の立ところ　光浪

葉柳の中より見ゆる灯かな　林糸

若楓

若楓まだもえかぬる夕色　みち彦

若ばえの薄き流や楓は夜のいろ　扇和

若楓舟子に来る客のして通る　東陽

牡丹

烏子に口付て見えてころがへて　文卿

安き世のやまざきにやあはれ柳　素龍

うつくしう散ばしめさん牡丹かな　成美

うるはしき牡丹を活す鮓の雛　羅文

月わかの牡丹にわかる花屋かな　烏翠

春きもかく後に持し牡丹かな　春祐

寂しくに行くをとまれば牡丹かな　烏扇

芍薬

一本の芍薬赤し清ゝしき　携哀

清おきて芍薬園の茶子けり　白雄

芍薬や雨に萎えたく下の宴　聴雨

葵

葵葉や庵下清く出てゆく隣　草夫

葵葉咲出る人の寒さかな　一肖

日あたらく葵まで中さし藻哉　闌更

祭の絆葵ぞしより結ぶなり　巣兆

花あふひ卯花は詠めなしける　雨塘

咲きさし乃さし葵は明られる　杉長

そらしもとる門向くあふひ哉　平雄

罌粟

すゝ縄の星の射ぬかれしの色　蒼虬

白けしや色の後日暮をおく人　芙元

鴫の細月浮くるやけしの花　耳谷

月の夜も滅の色まけしの花　五湖

けしちるや仕合せをあくちの姥　五纏

苔花

なつくさを草にとられぬ苔の色　擣堂

かまきりは生れ處よ苔の花　嵐丈

苔の色西乾くぬを咲けり　鹿太

水を掛てはめくさされ苔の花　素共

山寺の縁に這けり苔の花　鳥沙

杜若

世の影をうけたる色や杜若　太良茂

方丈のかりの入口や杜子花　時喜雨

杜若さくや芦田の水はくま　東陵

家に居て見る草むらし杜かな　碩鳥

鳶尾花

むくつけく夜深めやいちはつ花　於女 江川

声尾も咲やちらしもしばしの下　冬彦

はつゝゝやの小花も含まぬまやゝの花　護物

木艸茂

名残花も覚えずにほかなる茂みかな　みち彦

おそき池泉に茂みや流るゝ鹿　圖南

川の末ふる雨に茂る茂みかな　春鴻

草茂る木茂る海の中のゆる　栄枝

月を見るに花露のゆふむし茂りかな　一肖

木下闇

下やみや夫婦なしの暗しさ　梨翁

畑中や椋四五本の木下やみ　みち彦

網舟はまたゝぬや木下闇　貨僕

蕪を売し山伏来るや木の下闇　咲菊

椋蜂の声きこえけり木下闇　東峨

夏木立

奥くさき村に出けり夏木立　蕪村

此ほどに戸の音かしらぬ夏木立　宗古

川舟の下ゆくや夏木立　古聲

雨はれの緑に消るや夏木立　梅閑

夜くるゝの風になまめしよ夏木立　女 ちか紀

常盤木落葉

椎の葉落葉月のうすむころかな　護物

松落葉

さくさくと交ぶる庵や椿葉ちる　みち彦

常の光ゆくけや松葉ちる涼　弓雄

菴の夜誰昭るよ遠し散る松葉　李径

鶴よる昭のく夜松ちるあり　輪之

濱りきや一夜落葉よさそよ松　淡水

つもれる京色を艸の落葉かな　米彦

くへ椿でも好き竹のおちくぼ　玄鮭

注く寝く舟の落ちの音かな　哀丁

竹落葉

篁負く篠の落葉も[illegible]　護物

笋

艸の子や山路[illegible]も流れまはる　寿翁

艸の子や積もりてもおしらさき　みち彦

笋やはしり家名よふるすき　有月

痩山や笋いえや艸よなは　月耕

水筋の遠うよ笋河原の[illegible]　伊勢　帰来

麦刈

麦刈りや背の家は向川岸　柳荘

麦刈の手くま孫引や行く雲　何丸

むぎ刈や蚕の宗絶もはし[illegible]　草均

麦秋

人ありや麦として月夜まで　筑前　帰来

黄昏のそのへても光へ麦黄くも　北莫

くらき夜の片里白し麦の秋　伯耆　帰来

茄子

麦秋の月ハのぼりて出にけり　心非

麦秋の中に梓のあつさかな　輪之

むさしのゝ久留の中や初茄子　梅人

なつ茄子傍の矢白ハかくれけり　春鴻

芋の葉に一束そろへて初茄子　巣兆

なつかしき茄子のむやみ桝へなと　耳谷

さゝす梓にいちごはなれぬ身の上　柳居

土の色も古用にちらし蛇いちご　みち彦

植しもの人に知られず薮いちご　秋挙

覆盆子

覆盆子とる池のほとり侘けり　可磨

鷹入塒

そよ風に揺るゝ莚にいちごかな　ちか来

塒鷹の羽をのまゝにいさく　古去

鳴鷹の桝に井戸の雨かな　護物

杜鵑

子規月を待つ間の木の葉かな　万和

郭公嶺の雲ちる日の道し　みち彦

時鳥なくや燈入るちらし　茅麿

碎きめや山角と心すまる汁　浩浚

ほとゝぎす鳴や海にかくれぬ　痩菊

老鶯

鶯の老ては恥しなかりけり　得雨

老ぬれど鶯山を深入す　加一

鳲鳩

鶯の老し旅宿やかんこ鳥　捧歌
小まくらや老鶯に喜らし　年緒
うらはすや老ての声の一盃　一肖
かんこ鳥ふくや枯木の二ところ　士朗
呼子鳥雲にこふ人るとの八ツ時　守一
呼子鳥啼や山田の水まはる　鮫山
かんこ鳥木葉の筋もかくれなく　竹之
約束のたゆ日あしや呼子鳥　女 亀信
よしきりの啼てよし原秋以月　三肴

割葦鳥

割葦鳥やちらし芦人東の明る　雨塘
よしきりの世をもさくしや蟹の穴　輪之
ちしきりや里子らへしてくらつ家　一蕙

行々子

うき葉末の有もよきく行々子　木偲
行々子つかぬ日もよまもの家　而后
垢離のちのゝ原しや行々子　青岐
かへらぬ水のゆれくる江やよしきり子　幸光
行刹てもれぬ芦人家もまるで　石芝

鵜

鵜の飼の篝をもちらし家ま地　春鴻
放し飼も同し舟に寄せかれ　長翠
鵜の来る夜は知らぬ谷の宿　みち彦

鵜飼

鵜ら二つ放て叫ぶる早瀬かな　丹霞

人おりくさぬ魚ある鵜のくらみ　護物

かゝしさの昼となりぬる鵜の火かな　衰丁

あれは鵜をおかし鵜の火かへりけり　成美

鵜飼ら灯ともしや鵜のひとつ〓のまち　雅文

鵜飼らしや月のかけりの帰るさき　時喜雨

松魚

鹿笛の月は〓ぬる〓〓のあり　女　〓〓

砕子のおもて鮎かなたる鰹　吐月

ぬきさゝ夜はほのくらし初鰹　皐池

父扨の説鰹しや初松魚　鵜山

三日月のうけもまへるや初鰹　石芝

松魚まだ銭も持たりけり鰹　栄枝

鮎

鮎くれてよらで過ぎ行く夜半の門　蕪村

鮎よふや合歓の夕日のもゝ色に　〓〓

鮎時のあるじ居ならしや湖の村　雁嶺

鮓

鮓つけて誰まつとしもなき身かな　蕪村

昼過ぎや笹の葉鮓のくれの月　魯隠

春みの鮓つくらん人もてはやしける　三喬

鮓桶をあらへば浅き流れかな　徐貫

幸山の舟縄くゞりけり〓　黙翁

蝙蝠

かはほりを家とのもの(か)よ茶の香　寒崖

蝙蝠や梧桐の陰切て人流るる　東義

かはほりや足軽町の桐の露　竹馬

蚊喰鳥

蚊くひ鳥坂こえても撥りて庵し　葛三

蚊喰鳥の影さよ風のよしなし町　暁河

蝸牛

揺れるへる草伝ひして蝸牛　白図

井の底に住む日も蝸牛　完来

家もちぬ家も流るる蝸牛　恒丸

蝸牛天に角ありて[illegible]　素郷

[illegible]　花陶

枝蛙

木の枝も揺れるかな[illegible]人に[illegible]　塊翁

雨蛙[illegible]や[illegible]ちる　南井

堂の草も置ちるや枝蛙　周里

おほかたは[illegible]や雨蛙　何丸

蚤

草鞋の蚤[illegible]けふ[illegible]行　葛三

蚤の[illegible]人[illegible]しぬい日　扶長

蚤一つ[illegible]持て[illegible]見ぬ　湖鳥

山の井も人の汲[illegible]花　鷗里

蚤の[illegible]乾けども　也六

子子

子子も[illegible]や椿ちる　金彦

蜘子

子々の捨て遠しちりちりなれ　屋烏

はしふちの行へ沈む松葉かな　林糸

子々よまだくもの巣のなかに　應窟

子々らに醒かかれても走り出る　栄枝

蜘の子よ碑ぬ角に二日砕　輪之

蜘の子や日に浮世をのがれけり　護物

蚋

山も八人にくるよ蚋のさす　乙二

京を出て四五日したぬ蚋の行　木海

桐の葉にかゝる雨に蚋のくる　志げ里

打よせのありまくるや蚋のあり　一青

毛蟲

木の毛や毛虫の糸をかゝる時　みち彦

松の下や行かいそぎけり毛虫　一蕙

よもすがら休めば落し毛むしかな　方馬

栗の實と共に落ける毛虫かな　其青

蛭

牛よけし柳根の夜や蛭通る　六倉

蛭の血の垂るてよく日あたりかな　雨考

蛭をふんでちゞむさゝ草鞋かな　可磨

蚊

蚊起て啼しき秋の簾かな　茶静

御所の夜を押合ふて吸ふ蚊かな　扨長

蚊のさはぐ比や湊の月あかり　可孚

蚊遣火

蚊のこゑや糸内の流るゝ夕気色　心非
蚊のあしや花蘭のむしはらされ時　菊嶋
永くしい大文字の蚊やりかな　岳輅
柴の戸の蚊やりや相の風まかせ　三杳
蚊やりすこし煙るゝ蔵の嵐かな　牛氣
花備の御門も出けるや夢蚊やり　魚彦
蚊やりしは世を捨てる也松家かな　茄川

蠅

手拭を拾ふしれり蠅たゝき　閑更
松根の蠅はらしされ模から外　擕堂
蠅まとつ時はちいさきものかな　雪雄
古びたりるさ吾ら螺にして白髪かな　玉珂
ちからの突きて吾し我の蠅　翁風

五月

うつくしう月の中にも五月かな　少汝
ひとたびもおもふ五月の窓の蜂　嵐夫
蝶ぬれて鳴く声や五月かな　二川
女将の草に隠れ入さうかな　双鳥
津ふれば田井に亀鳴く五月かな　聴雨

幟

蛍の子まうさ出かけ幟かな　柿居
片町の帰りかけ立てるのぼりかな　太無

飾太刀

杉なや上杉殿のさし幟　袁丁

杉かけの幟は張るまじく　路鄭

おさな姫も手作り息子は飾太刀　蔦三

君か代の不用の弓や飾太刀　芳居

競馬

紐つけ人をそえてや彦ぬくゝる　五明

家鳥の白きは負けてくらべ馬　石芝

木かくもし若き女房や競べ馬の日　護物

印地打

君か代や印地すれくしかやえくち　梅占

印地かつもさてまけてさら免れひ　玉光

まだ人のこし流そへてや印地打　作意不知

粽

くすくすと夜の雨にかかくし粽かな　菜兆

嫁しうて旅人むらふちぬしきかな　菊所

花も実もさのみ子来て粽かな　青芝

子やさとの千代から粽のちまきかな　時喜雨

粽ゆひてうちおくれたる粽の雨　女わさ

菖蒲

蓬なくて刈やたさし也軒端かな　蘭更

傘まそくらぬかとの菖蒲かな　天外

花くもの露降りける菖蒲かな　蕉雨

たしかにはのめ人よさてかやえかり　一蕙

月雨し新の菖蒲の雫かな　南鵲

菖蒲酒

かゝ結のむ下戸ハ句ひを菖蒲酒　政二

髪菓ハ座に孫見てあやめ酒　太無

傍ゐの月もさそひしや菖蒲酒　哀丁

帷子

朝戸出や帷子さらさし擣の雫　篤光

帷子やむかし仮ねる月のおも　揺月

かさねしやすゝきおほえて私の月　九二

帷子や好くハさる茶白き　空元

帷子ハ見ちりて清しくぬ男　利雪

半夏生

猿煙にハ好の祠も羊夏生　草夫

まつ系こ戸門の宿くさよ羊夏生　護物

梅雨

八百筆梅雨もあらくに染まりけり　伯先

抽の毛もまだ実に成りぬ梅の雨　みち義

庵の木も伐られ去にけりや入梅の空　李尺

かくれ清の下進みかけり梅雨の色　風實

入梅や之葉の清りぬ花細工　玉川

梅雨晴

晴や晴や先鋳卯売油うり　政二

梅雨されの裡や米の渋抜ひ　竹馬

山寺や入梅されするか屋の雫　南井

五月雨

暮くはゝけらけて常かれ五月雨　凡十

さくされの夕飯さやき山家かな　玉泉

五月闇

五月雨や一日きえぬ蚤のはら　李長
舟さしのうきさためしや五月雨　信喜
浅草の家ひやかしさみだるゝ　保吉
うき家や草の葉志けり五月雨　女ちさ
小とりふ草の透るや五月やみ　岳斎
釈迦の庭を潤るさつきあめ　得雨
押しあけ戸あふ浅きさ五月雨　壺斧

虎雨

和尚ハ人まかりや五月やみ　蒔志
尺八の音ハ花よとりの雨　成菱
絵の鳴ぬハ不気原の雨　巣兆

夏雨

月花の門ともやきらうの雨　輪之
彼岸ゟも衣の色かはる雨　玉光
松山の色ふりたぬれ川の雨　午心
豆の根お流るゝや夜の雨　露白

早苗

苗の色坂のあきに里の田ゆふだち　乙二
藪むらの灯や遠し仕舞苗　叙来
芦の出しも苗をとる笑ひ宮　椿堂
苗とりの雨や一筋あさめぬち　輪之
橋のつゝ子の白いてまろむる子苗ハ取　女すゑ

田植

川上の田ふ気付りや草の雨　蔦三

早乙女

精の餅ニみつ腹のはら田植かな　星譜

水口より掌押曲て田うゑかな　阜池

直ニうるむ衣ハくるゝ色の小田　栄枝

浮しきハ寡人もましる田植哉　素撲

早乙女の夕日おふんてかへりけり　暁臺

昼白ふ足拭かけし植女かな　巣兆

くる人をまて乙女こふもとりけり　不根

早乙女の子をおもひぬしてもとりけり　八朗

さそらめや粟くふ八月なかれけり　湊水

粟蒔

粟蒔手人のあとのく春の清し　浦人

我宿の自慢よまつや粟五合　玉光

夜とても辛し小鳥ニ粟をまく　一蕙

竹植日

竹植し草育されてゆるく　臥央

立ありとれし竹ハ植ぬ波ともに　万和

竹植て竹すらなし山鹿ふる　丘高

竹曝る日とても仏像まで植てかり　漁舟

月を以る竹や人や竹植る　草夫

若竹

之かるる柳の月を竹すかし　晩烏

うらうら年の竹の月とかす竹　可亭

竹や田ぶうらむ下ゆく　蘭魚

合歡花

ワか艸や里のいも由の墓まゐり　双湖

若艸や滝のうらんまのねふり　五鹿

手波らしや合歓の花さく風の筋　宗讃

合歓の木旅も出しきつま　名ひと

その蟬も鳴るさい花もさらや合歓　亀丈

むら合歓歳や合歓さく水の音　女 司馬

さく合歓をさらして往ん椿小の雨　護物

樗花

府神の掃除もいらぬや花樗　三笑亭

蝶くるや袖には庭の薫や樗ちる　一寫

美しさ白や樗の花の陰　三甫

栗花

こちら雨は涼樗その奥の人涼しさし　桐栖

その行も花よ竹の花の栗　真栖

山寺の日さへうすりて栗の花　其石

うき旅もおもひ涼しりやくもの花　一蕙

小くらさハ家のむさくし栗の花　一桑

柿花

はらりひく銭も打ぬや栗の花　護物

葉むしろよ花さらさらり柿の花　樗堂

渋柿も嬉し涼えよむのしち　鶏里

山かけや田のそよ落ちる柿の花　其翠

常よきもそのつや柿の花　詠帰

呼樋さぬ家もまへ明し柿の花　杜英

山梔子花

山梔子のちるや未よくも蔦のやむ　玉光

くちなしや見る人傳の庭しこて垣　十ゝ波

くちなしハ来るられてすむ森茂り　五明

紫陽花

紫陽花もまへ咲く兒をとるも山家かな　乙二

紫陽花の夜ハ其まゝりし山の町　みち彦

ゆらさいの濃まよる人山寺かな　掉歌

紫陽花も平や鄙の畑ゟあさし菊　乾夫

南天花

南天の花ちるまゝや縁のうへ　乙二

南天の花咲ぬ色もなし小門口　鴻里

百合花

糸すゝの葉や月さし露ゝ法ゝ　亀丈

はこゝ庭の百合の清くて年ゝ　成美

傘借しても一もと切ぬ百合の花　来鉅

百合の花男んたくとらさし　菁水

草の戸ハ見えぬるも百合の花　津くも

一揃ハ田よりけふたの中の花　楚遊

姫百合

姫百合やせわしき宿の露　指月

姫百合よりさく露の山の麓　竹馬

夏菊

夜菊や里の古家の門清し　岨翠

あつ菊ハむつかし乾ぬなりけり　挂程

梅子

なつ菜や西りよむきうさぬ　正光

十日とも点しぬ角にまし夜の菊　栄枝

夜の菜白梅八色のくすしきしも　女 千恵

あてしるやすれみるてなつしさ　蕎笠

八重ならず見てもおちこのちらしぐさ　みとし

冬のまへとかお桿子の川ふやき　武陵

夜の笛淡きしとのうこゝろ也　義香

あてしとのこゝろ妹とよるまけし　夢南

かるゝゝの茶目律とよく雀　乙二

酸醤艸

うゝくみのむ袂窟し数うゝさ　竹吾

十薬

かくさくのほうくて蠖にく月夜かな　護物

十薬や彩ぬくさぬ戸にし家　黙翁

とらくしこふむみもいくほ藪の葛　淡水

紅花

都よそ見ても色をや何のさかな　吐月

湊まね盃とこう何のさ多　雉啄

まのむかし播ろおほむやおくるけ　さち雄

五の花寒車のよきところ　条人

藻花

蓮見よりあさき角の中日かな　三津名

藻の花ハ夕の月はなれし　みち彦

一夜ひ深ん君ハなかりし藻刈舟　方中

萍

羽衣をひろげしごとき葉ぞさき咲　太笻

萍の世は萍に用なき浮葉哉　默翁

古池の流れて清む萍かな　雄扇

漣のうきくさ流す時は来にけり　一草

うき艸や蛍燈かさはてもなる　屋烏

萍や欲をはなれし人の上　亮几

うかるゝ浮の花や水村の根なし舟　軽子

萍の一里流れて行末か　車両

真菰

川島や青田の中の真菰草　保吉

眺めしの青みそらしも真菰刈　みち彦

狩人の一猟留て真菰かな　手焉

青芦

青すゞき芦のわか葉の槍の先　士朗

うき世捨ん夜刈る芦の丸屋しく　みち彦

鴛鴦の乃つく叢なし芦の面　乙二

澤瀉

青かしや撓くしぼむ山の雨　草夫

おもだかの小田まてひたる木根かな　巣兆

おもだかや苗押付し田の余り　護物

蓴菜

蓴菜や筌をかけたる山の雲　李尺

引しい緒もちてもよ蓴かな　旧友

川骨

川骨の二もとさくや雨の中　蕪村

蓼

川骨や多くは故の出し葉　白雄

河骨や押あげて咲しまふき中　保吉

久しぶりや答はかりもむかしから　釣翁

川むかひや鶏の虫掘る藪の沈　関雅

蓼の香の辛味よき僧の臺所　汶二

雷くれて蓼すりかゝる宰色ぞ　巣兆

小ぶりして蓼時川やよどの露　呑彦

蓼咲て眠の露をこぼし来る　護物

鹿子

死さへしてそのちハ来ぬ鹿子かな　蒼虬

風の吹日ハ白くなきぬ鹿子かな　津人

秋の中立ぬけかる鹿子かな　乙二

すゞ子の親房にうし鹿の後　可麿

藤すゝきなど川よさふ鹿子哉　六車

鶯音入

寺を入て鶯ながらなけりも　保吉

音を入るゝはすほと鶯すへてり　石羊

水雞

月も坊や水鷄ふく来の程の上　素檗

朝湖よきぬ水鷄ゆくの宮の流　木海

田一枚いつしの家やたゝつ水鷄　晋峰

又翁よしの水鷄も見ぬ夜月ぬ　百月

忘られし水鷄淋しや垛の径　竹馬

蒼鷺

青鷺の行方も知らぬ孫かな　標堂

蒼鷺やそよく麦の五六反　萬之

青鷺の身ふるひ風の日暮かな　知方

青鷺の足を洗ふや古江辺　玉光

蒼鷺や峰ハ嵐の風に吹　九　應之

鸛

鸛一羽高樹にとまりしハ行そ　白雄

鸛婦とハ見えて鳥ハ人さまかり　乎需

鳰浮巣

雨ハしく秋鳥にふるふ浮巣かな　力和

静庵の世にましておれ浮巣かな　于堂

続けし浮巣をつまるかしらな　野渡

入日さし海光の花くもりさゝ巣かな　さち雄

鳰の巣や風の吹日ハ船多き　桃生

鳧子

鳧の子や盥にうかむ子の母ふ　みち彦

鳧の子や定めつゝしう人に鳴　護物

蛍

ほろほろや指はなれての係かな　蔦三

蛍火の蛍を宵に宿屋かな　典路

君来ずや華縁の蛍その弱き　菊成

とふ人常陸の口をよけもせく　菊塢

生咲の犬もまかり忘るゝ坊　拙生

照射

けしかけのや照射果て水の音　若翁

火串

ともしする人なくてさへ漁舟　士朗

川上を鵜の業たらぬ照射かな　昌作

松の炬照射ともしの時まもり　方貨

舟ハ子よ子ハ照射して寝ぬ夜かな　護物

火串立て風よ知る　松の暑さかな　保吉

手に触つる空からゆるかくしさ　両塘

納る火串納る女房や恨むしん　麥洲

寝人まで竹に風行く遠火串　千枝

分けて草も見通る火串かな　蘭大

六月

六月や白川坂の小川　埜彦

六月や櫻もてらむ蝉の声　貞松

六月や山から飯をくふ月夜　斗入

六月の歌腰しきる桔梗の形　湖外

水無月

六月や草の宿さへよのまゝに　石海

水無月や荻かうれけりの露　長翠

水無月や稲妻いとゝ身にさそる　葛三

水無月やいらふも粟八日和くは　芳居

水無月や江湖の厠乾掃す　護物

氷室

不二をたへてぬかりしく氷室の日　青牛

夏氷

松むしろ出しかゝる氷室守　汶々
氷室守清水よりけもさえぬかや　輪之
梅が先し妻をもちたれ氷室守　淡水
神ごとの世にふるゝる氷室かな　一肖
齢延ふも吉凶さまよなつ氷　みち彦
笹でうけへきこやこの氷かな　袁丁
加賀殿の屋敷すゝし七雪百尺日　茅麿
岩奥もおよぶ賣るなつ氷　華文

富士詣

小田原で医者の多さよふし詣　一蕙
不二垢離の赴くさき月夜かな　几二

祇園會

鉾の日や不二同行の雪の杖　護物
祇園會や僧の宿とふ桶の許　蕪村
夕立の沙漬ひや神輿ふる　椰几
神輿の晃来し花も侍めくし　何九

祭

鉾さをもつく祭の太鼓かな　樗良
樹々深く森の祢め曲哭かな　白雄
鯔子をかぬ見あきさへ闌けて　炒扇

鞍馬竹伐

竹伐や法師か太刀の尻下り　さち雄
牛さまや貴宿も山は淡かそれ　一肖
竹伐やふるきを杉も古きを年　護物

施米

後所し施與ふかしけり施米かな　蕪村

人絶よ古塔まで鳴る施米かな　箕六

雨乞

雨乞よ家もありしらん草の庵　渇雨

占ふよ幸先のよや龍の聲　玉光

土用

売僧の猥書きて見ゆる隙土用かな　春鴻

蕨伐の帰る翁や土用入　茅麿

笠の端よ小笹さしける土用かな　岩甲

許子の子非述て取入る土用かな　可磨

巣にかきの山を取る土用かな　一宵

虫干

湖の風なるものゝ念に虫干し干　羅城

むし干やうらやまれたる料理人　蕉彦

虫干や刀かけたる世の物かたり　弗水

虫干や立てつる戸の相柳　大江丸

むし干や雛なつかしく立てる隙　如毛

暑

暑さかりやむつ移の木し枕の枝　塩叟

さらへ船つけても暑し大手の堂　年緒

あつさかりや寄ろるなさの小酒屋　志けを

烟干にうなふ人暑くさ親はりな　山有

夏日

夜の暑田にも失ふり令光る哉　少年 岐山

草の戸や雀の巣まで夜ひとさし　雨塘

炎天

山水も夏日のさかへのきまれん　みち彦

夏の日に照らるゝ道や雉子の羽根　井眉

静かに八仙をとふまさらん夏日さし　護物

炎天も限ありてゆる野山の影　蒼虬

炎天や竹の中まで涼しく道　竹児

琵琶負て炎天を通る座頭の坊　還古

雲峰

三日月にかゝりけり雲の峰　米彦

雲の峰漢村の柳まで一つ也　乙夫

山人の拍てとるや雲の峰　晋峰

鬣ゆかしさるの行義や雲の峰　菊塢

夕立

雷の跡から家へ急ぐ鷹なり　泰水

夕立やさて涼しき情のうけ　白圖

ゆふだちやはらりと銀草の簾　月居

夕立のきらめくさまし山の端　武陵

夕立の筋見えながらくる雲　薫岱

ゆふ立を追ふして情の工とらか　仙枝

乙鳥の羽の小きさそふ青嵐　耳谷

青嵐

青嵐まへつゝしら男とも　那讃

青田ふく北山の雲まで鳴　寫月

旅僧の袖もむしられる青嵐　女 ちよ

風薫

風かをる里や手洗の竹の奥　蘭更
かぜ薫る桜の下も松陰も　盃駟
うねる子も流るゝまゝや松の声　葛三
三日月や風かほりくる汐しら　椿堂
風薫るとて合歓の葉のうつりか　桂裡

涼風

きよらかや涼しき白の灯のうつて　暁臺
すゞしさを采よりくる庵かな　岱青
涼しさや新白妙によそめて　成美
涼しさの夢さるとの夢まくし　菅庵
糸よりしぬえるよ涼し垣の草　女 八童

月涼

月すゞし堀きりて夜の走りける　也有
呑こみて涼しさ月の遊びかな　士朗
涼しさや硯の口にゆる宿の月　三津人
月涼し茶の葎の小家かな　輪之
月涼し新ら露くし葦ところ　仙骨

納涼

皆いつも土産よき夕すゞみ　釣翁
涼しくも月かゝる山椒し夕すゞみ　桐栖
この橋やまろ笛へ夕涼　女 志う
舞くの酒盛過しをゝて　竹扇
ふりしきりの縄もすゞしき　挂羅

清水

山路の蔓にまとふ清水かな　菊所

この比や清水にきて山の児　三津名

緑をもわすれハきぬそ清水くむ　菊塢

鶯の子のなく川辺や門清水　一髄

谷の末てさむしく志なる清水かな　素龍

晒井

晒井や翌ハ誰ける仏の日　一蕙

ゆるし井や東方のふかしくもゆる　双湖

さらし井や秋の花のちるけしき　凡二

葛水

葛水や荻なき中しく紫の光　宗讃

葛水やきよし肉縁の立しかき　胡準

葛水や家をかなへし似たし肯　完来

葛水や夕食の宿にまあるもの　みち彦

水飯

水飯や翌ハ出て行く草の宿　乙二

水飯や巣の沖のひとく時　米彦

水飯や啼山家に羽織をかけし日　此江

水飯やものうく人ハ通ふ百　玉光

心太

蠅ともに川をぬけさや心太　みち彦

味なくも清かれところてん　何丸

一夜酒

涼み子に立て入れし一夜酒　蕪村

村中にうつりやかましく一夜酒　巣兆

簟

竹婦人

臼すり戸を乗かへてふむ六一夜酒　嵒斎
隠るゝハ新酒ぞや一夜酒　風谷
甚ふ子と呼ハ子ふし一夜酒　棹歌
来の字やおもてしこ嗅ぬ走むり　万和
横笛川芽こそ流もり　簟　武陵
座をおきに挟むくもしたむしお　旧友
傳而の読のむろさよ米寿う流　一蕙
おもふこの硯の影行も簟　みち葭
座て陳ハ何かおもそく竹婦人　一枝
吹宿を南向なる竹婦人　三顧

汗拭

竹婦人こともあまり出しかり　暁翠
真ほんのりさくらん安し竹婦人　麥里
月も風も淀くうめや竹婦人　亀夫
汗拭ひつくれし人や新の杉　政二
白られ人とさえ見とけや汗拭い　笠庵
古法との水をかくさん汗拭　鴫里

夏痩

夜痩も秘しけるや角力取　玉光
夏やせや人なくしもぬ茶の塵　菊後
夏痩を三へ寄つきこのを余所　素孝
其身痩や細るる光く隠の杉　岸根

百日紅

散るも百日かの日おくりけり　瑞馬

百日花日に〳〵色は益しきさき　南井

凌霄花

凌霄にふく〳〵雨やそのむし籠　其彦

凌霄や古の垣の古籬　吐月

松かさに露も古し凌霄　光浪

凌霄や庭に湯をまく禰宜が家　一肖

蓮

ひと足て来ぬかたもとや蓮の花　野松

清きものめでたくは蓮の露　千影

月も日も汀にすます蓮の下　裹丁

蓮さくや百合もあやめも露の花　利雲

夕顔

籬根のつゆつきすむや蓮の露　菊塢

夕白の花や名もなき竹の奥　雪雄

ゆふ白や生海八町の下通り　秋峯

馬洗ふ門の月夜やゆふかほ　縣卿

夕白は妻の裾し花る夫婦かな　季道

夕白や相撲力も法が藪者しき　九朴

昼顔

昼がほの姿を睡り松しく〳〵　春暉

競子とも兔女が見目とし恒　素撲

去年白や巻に出汐しかし厠　市榮

定かなや蔵まへ〳〵時の口　長湖

葱

むら白やうちは赤かき小城　可厚

宮守の葱ハ霜の彼かな　二柳

羽音のふいつくの宮をたおれ来し　闌更

有かしてかいてし松葱かな　菓兆

葎花

咲かゝりて見よ花白きむぐらかな　万和

花葎摩き源のむぐらかな　竹囱

むぐら折角咲ぬる社家かな　指㽵

花咲て粉けしなや八重葎　衰丁

摩ふえて盛きき坂をむぐら咲　黒鮎

麻

みなくの穀子すかしや麻の中　蒼虬

風渡る隣さびしや麻ばたけ　百嬰

麻越しに見ゆるかのくさぎりぎり　鵆季

麻の葉の音ばかりやおもき宵の雨　芦舟

綿花

練り残ぬや麻はおぼろく月　護物

二畝余りも花のほんその綿が咲　孤山

おさき咲く綿のいなさや綿の花　菊塢

とらし畑は昼の光よ草いきれ　女 ちよ尼

瓜花

夜の清き綿清が中むしや綿の音　亀丈

雷に小屋ハやかれて瓜の花　蕪村

その里によく光さる瓜の花　玉屑

瓜

新月や涼しく咲し瓜の花　霞村

まくらやきさし花茄子の瓜畑　暁浦

ぬけてゆくみちは涼し瓜のいろ　撰良

こゝろ合しみかきすがや瓜作　玄斎

庵しめる瓜も枕をもつ人新　仟久

いつけおや瓜流行月を待ちかね木　雪守

日ぐらしの鳴く人くぬを瓜の番　茶静

夏芒

芝すゝき横に流れて芒　壺山

夏すゝき順礼宿の見えゆる　諸物

夏草

夏くさやよる波の行かな　闌更

夏くさや風のよしもしらぬかな　長琴

夏くさに近よりてやさし季の糞　大巣

竹の夏虫しるむかし咲　無南

夏くさや流れ迷ふの子て来　ちりき

夏野

きゝつけおきし夢や夏野の夜の丁　士朗

白雲のさしや夏野の名ふしき　丘高

皮晒す春の積ゆる夏野哉　青牛

一歳ゐして小むつる紀夏野かな　菊所

青田

紫蘇えくさ里とく青田かな　讃物

三日月や鯉振ゆくほ田　春鳴

一棹ハ青田へいれるつゝしかれ　梅價
ゆき送る青田や風の渡りけり　東私
乙鳥の羽ハ風さハぐ青田かな　炉扇
始ぬりし家色を持し青田かな　有臺

田草取

乗て通る汀もあれど二番草　冬彦
太麻も見しし豊なき田くさ取　袁丁
とりあへずの揃ふも似合し田草とり　霞湖

川狩

川狩や多くもとらぬ藻の黒　楽水
川狩やけふ来てハもくの芝　鶏六
川狩や見かへる先ハ柳の木　都克

川ぞひの草ふきふき出る流れかな　瓢舟
川狩やけふや寺の小僧かな　竹市

羽抜鳥

こぼれ葉に世をひそむ雨よ羽ぬけ鳥　葛三
麦かりにひそむ雲も羽根ハ紙　叙来
隠れしぬけしきや扇の羽ぬけ鳥　笛さく

翡翠

見ハせぬや濡しぬれたハ古居さん　吐月
船築や根も流さる雑木藪　玉光
夕くれや潤へ落ちの草の戦き　菴十

鵜

子祭来よりけハ隠るく新の杉　岱青
世を隠や海士の家の青葉かな　袁丁

夏虫

螢みしや雁なくゝのも見る比　文貫
また露や風ふきまよへく螢　梅月
いさりの火くらくや草の螢　句光
雲ふかき月にはらふ夜の虫　方廣
夢はまや葉をとくとも夜の虫　青牛
名ところのいはまよし夜の虫　不鷺
夜の虫や草の露に消りへや　すゝ雄
小舟さす岸の葉にも其の虫　幸蛾
灯に通ふ虫やみなれし旅の宿　午心
虫に灯をとられしまゝよ旅枕　山杉

灯取虫

盃のうちに落る灯取虫　森樟
水にてる月はゆりくる虫　よし雄

御祓

かゝくくとも潮にまかん夕すゞみ　月居
亀の背まとのゝやる御祓　輕舟
や蘭の香も流れみそぎかな　麦花
夏ゆくや浅き禊の五位の亀　夫山
山崖の流れて流るゝ御祓　寸艸

名越祓

水むすぶのゝその名越の禊かな　標良
うけ先の清めぬのゝも名越の夜　みちひこ
かさへのはらもらん名越しかな　乙二

茅輪

獺の毛や名越もとりの川ならへ　輪之

されはこそぬけるちの輪かな　可都里

草むらにかゝめしも形の茅輪かな　尼 星布

造作なく出来て涼しき茅輪かな　心非

人去て後もしはしちの輪のゆかな　里朝

秋近

秋ちかくなるや古家のすゝき草　秀彦

ゆふくとしくなるや障子の紙　茅麿

夜なかの文度もなしや江の小家　竹吾

夏呆

いつ夜の水の庵としゝかなく地　河道

川水の退きて許や夜呆ゆ　爽夕松